

「それが冒険ぢやないんだ、最も安全な方法だ、けれども制限があるんで、今では其他にもう一つの事業 事業と云ふ程でもないが、うまい金儲をやつて居る」

「は、あ……この行詰つた世の中でね……」

と、私は期待に胸が躍つた、岡辰老人は口元に微笑を湛へて、

「大きな傘をさせば、どんな雨が降つても濡れる心配はない、と云へば子供騙しのやうな話だが、自分の勤先が大きくなれば、自分も大きくなれると云ふことを前提にしないとこの仕事は出来な
いんだ。昨年亡くなられた富士製紙の穴水要七と云ふ専務取締役がよく云つて居たね。よく世間では社本位に働くと云ふやうなことを云ふ人があつたが、それはみんな嘘だ、人間はどんな場合に自分本位でなければならぬ。自分は明治四十一年に富士製紙の營業部へ入つたが徹頭徹尾自分本位で働いた。何とかして自分を大きくしたい、どうにかして出世したいと明け暮れ考へて居た。それにはどうすれば宜いか、それは此社を絶対に信用して大きくすることだ。此社が大きくなれば自分も大きくなる、彼は獻身的に働いた。そして月給の一部分を積立てたり、ボーナスの全部を使はず富士製紙の株を買入れた。明治四十二年、時の内閣の消極政策に依つて、財界は

極端な不景氣となり、富士製紙の株なども五十圓拂込の株が二十二圓、二十五圓拂込の新株が四圓九十五錢と云ふ安値に惨落した。會社の實況を知つて居る彼は、こゝが買ひ時だと云ふので、其株を買つては擔保として金を借り出し、其金でまた買入れては擔保とし、また買ふと云ふやうにして六百株からの株主になつた。さうなつて見ると雇はれて居るやうなもの、自分の會社と同様である。自分だけが働くのでなく、他の社員の分までも働いてやると云ふ大勉強、更に十年一期として株を増加し、遂には十五萬株からの大株主となつてしまつた。これなどは自分本位が結局社本位になつた實例で、月給取諸君には好いお手本だと思ふね」

「宜い話ですな」

「ところが其男の勤め先は株式會社でないんだ、だから株を買入れる譯には行かない、そこで彼れの目をつけたのが、其社の信用と云ふことだつた」
と、岡辰老人は明るい顔をした。

三割三分の利益

「その社の信用と云ひますと……」

「その社から發行される約束手形へ目をつけたんだね。商取引に用ひられる約手と云ふ物は、信用と信用との取引で、多ければ多い程其社の盛大を物語るものである。孰れも取引銀行があつて其手形を割引いたり、交換したりする事務を扱つては居るが、中にはそれほど大きな取引でない出入り商人が居る。これ等は銀行へ行つて特別に扱つて貰ふか、金融業者のところへ行つて、相當な日歩を拂ひ、割引して貰つたりして居る、それを此組合でしてやるんだね。今のところ銀行では百圓に付一錢八厘から二錢位の日歩を取つて割引する、それを其組合がやれば銀行へ拂ふだけの割引料が其組合の利益になる譯だ。發行者は自分の勤めて居る會社だし、相手は出入りの商人だし、便利と奉公を兼ねた立派な仕事だ」

「なるほど、社員が自由に割引いてやるほどの手形なら取引するものでも安心して商賣が出来ると云ふものですか」

「その通り、社員が其社の事業を裏書して行くやうなものだからね」

「どうせ銀行へ支拂はねばならぬ割引料だから、相手としても別に之れに依つて別な支出がある

と云ふのでなし……うまい方法ですな」

「ところが、積立が積立だからさう大袈裟にも出来ない。程度を超えることが出来ないんだからね。しかしさうやつて二錢の日歩でも年利にすれば七分三厘にも廻るんだから、従つて配當も七分三厘になる譯だ、斯うなると人間と云ふものは慾が出て、毎月の掛金は、滞りなく拂ひ込まれる。資本はだんぐりに増加して行く、誠に順調なんだ」

「さうでせう。張合ひがきますからな」

「さうなつて來ると、もつと有利なものはないかと考へて來るのも人情だ。彼はまた一つ發見した。これは今では立派な商賣になつて丸ビルで堂々とやつて居るが、最初は此男が考へたと云つても宜い位だ」

「商賣ですか」

「いや、商賣ぢやない。其社に勤めて居る社員達の爲めに便利を計つたのが原因さ」

「低利資金ですか……」

「さう云へばさうも云へるが、省線電車の定期乗車券、そのパスを利用するものが其社だけで五

十人からあると云ふのだから、郊外が發展する譯だね」

「月給取りなんて云ふものは家賃に重大な關係がありますからね」

「さうく、郊外居住者はバスが米に次ぐ重要なものだからね」

「そのバスをどうするんです」

「このバスは一月、三月、六月、一年の四通りに別けられてある。俺のところでは一月のだが、毎日通勤する人は一年の方がずっと安くなつて重寶なんだ」

「しかし一年は一時に金が出るんでせう」

「そこだよ、此男の着眼は……、いま假りに東中野から東京驛までの賃金を示すと、

- 一回片道分 十五錢 往復すると 三十錢
- 一月廿五日として 七圓五十錢 一月のバス 五圓
- 三月月のバス 十二圓 六月月のバス 十八圓九十五錢
- 一年年のバス 三十六圓

となるから、一月より三月の方が安く三月より六月、六月より一年の方が安い

は一目瞭然だ、ところが一年のバスを買ひ得る人は多少とも餘裕のある人で、月給が右から左へ消えてしまふやうな人には及びもつかないことだ」

「全くですな、金持ちには都合の宜い制度に出来て居る……一寸社會問題ですな」

「その通り、一年のバスを買へば二十四圓も助かるのだが、それを知りつゝ一月五圓のバスで我慢して居る人が多い。其處で此組合が活動する餘地が出来た譯さ……」

一服吸ひつけた老人の鼻の穴から紫の煙が二本出た。

團結の威力

それは一月月のバスで五圓づつ支拂つて居る人達に一年のバスを買つて貸しつける方法である。現在丸菱商會と銘打つて立派な營業になつて居る程である。それを一つの會社内で何十人何百人と居る郊外居住者だつたら、會社そのものが便宜を計つてやるも宜いことだ、と岡辰老人は精細な計算を取り初めた。

「一月五圓のバスを四圓の月賦拂ひにして一年分のバスを買つてやると、バスの使用者は一

ケ年に十二圓助かることゝなる。そして尙ほ且つ組合の方の利益が十二圓になる。さうだらう、五圓づゝ十二月と云ふと六十圓だ、それを四圓づゝなら四十八圓で済む譯になる、それで一年の定期券は三十六圓で済むのだから、まだ十二圓儲かる勘定だ、先方の人に利益を與へて自分の方へも利益が生れる、これがほんとうの金儲けと云ふのだ」

「しかし途中で何かの都合が出来て解約しなければならぬ人が出来たら、一寸困りはしませんか」

「それは半年以上の契約にして置けば大丈夫だ。假りに四圓拂込みの人が七ヶ月目に解約する場合は廿八圓の掛金で、あとの八圓は無駄になるやうに考へられるが、これは六ヶ月分十八圓九五錢と一ヶ月五圓と外に手数料五十錢で、合計二十四圓四十五錢を拂込めば鐵道省で戻して呉れるから、結局組合の方では三圓五十錢儲かる勘定だ、さうなると解約者が出ても利益に向變りはない」

「はゝあ、返して呉れるんですか、それなら別に危険はありませんな」

「その利益を一寸算盤に取つて見ようぢやないか、假りに五十人の人に此方法を應用するとして資本金が一千八百圓也さ、宜いかね、先刻の勘定だと組合員が一年と三ヶ月ばかり積立てれば出来てしまふ譯だ、そこで一人當り十二圓の利益だから五十人で六百圓と云ふ金が儲かる。千八百圓で六百圓の利益と云へば三割三分五厘弱と云ふことになる、これが商賣になれば相手を無限に殖やして行くから、素晴らしいものになるが、一つの會社の中でやることだから、需要者は無限と云ふ譯には行かない。資本は殖えて行くが利益はいつまで経つても六百圓と極まつてしまふ。そこで彼は更に考へたものだ」

「はあ……豪いもんですな」

「面白いだらう君、金儲けと云ふものは……考へて来ると無限なんだからね」

「なるほど一人では働く餘地のない資本でも十人十五人と集まるとこんな働きをして来るんだから、考へることですな」

「さうだよ、これの大きなのが信用組合と云つて、銀行でも一つの團體として扱ふから、資金が必要なら、團體を信頼して低利で貸しても呉れる。月給と生活費で一ぱいぐの安月給取りで、個人としては十圓の金も貸し手のない身分でも、五人十人と束になれば、立派な信用が出来て來

るんだから妙ぢやないか、一體日本人はやり切れなくなるか、困つて来るかしなければ協調する
と云ふやうな氣持ちになれないので困る。各自が充分に働ける際に一致團結すれば、どんな事だ
つて出来ない事は無いんだ

と、岡辰老人は腕を撫で
た。

「全くですな。そこで、其
組合は次にどんなことした
んですか」

臺所の方で摺鉢の音がす
る。

「やツ、たうとうと、汗
が初まつたね」

と、岡辰老人は浮腰になつた。



儲かる家作

「まあ、宜いちやありませんか、折角の心盡しですから……」
と、私は引止めた。

「いや、奥さんに御迷惑だ、さんぐ憎まれ口を利いて置いて、御馳走の手數までかけては相濟
まんよ」

「そんなことはありません、あれも近頃痛切に經濟知識の必要を感じて來たらしいんです……」

「あはツはツは、時節柄だね」

「そこで組合の仕事はどうなりました」

「さうく、それから其組合は家屋の建築に取かゝつたんだ」

「は、あ、あまり儲かるんで、會員の住宅を作つて行かうと云ふのですな」

「いやさうぢやない。俺がいつも話すやうだが、住宅と云ふものは、生活の方針が安定して來た
時でなければ手をつけるものではない、どんな身分に出世をして、折角の家が氣に入らないやう

になるかも知れないし、一時的の景氣に任せて、あとで苦しむやうなことになるいでもなし、都會に住む人の住宅だけは全く考へものだよ」

と、岡辰老人はしみじみらしいことを云つて胡坐をかいた。

「なるほどね……そこで組合はどんな家建てたんです」

「六疊に四疊半に二疊の玄關と云ふ極めて小住宅さ、それも二軒建の長屋だ」

「へえ……恐ろしく小さい家ですな」

「家賃が十七圓さ、二軒で三十四圓の上りだ、建築資金は千八百圓……一切を含めてね」

「無論郊外でせうな」

「それはさうだ、市内へそんな家を建てたら引合ふこつちやない」

「郊外でもうまい算盤には乗りますまいな」

「いや、これ位な家なら引合ふさ、敷地が三十坪として地代十六七錢と見ても一ヶ月約五圓だ、火災保険や家屋税の引當に一ヶ月四圓として合計九圓、三十四圓から引くと二十五圓の収入になる。資本は千八百圓かゝつて居るが敷金を百圓づつ取るとして二百圓になるから、正味千六百圓

に對する一ヶ月二十五圓は年三百圓、一割九分弱と云ふ利廻りになる」

「パスより薄利ですな」

「それはさうだ、しかし此方は無限だよ、何軒家を建てようと、相手は他人なんだからね、勿論社員だらうが、組合員だらうが希望者があればその條件で應ずれば宜いんだ」

「なるほど、そしてパスの月賦を其人達に應用してやれば、之もまた一つの財源になる譯ですな」

「其通り、金を金で置いたんでは四分五厘か五分が關の山だが、物に代ると金と云ふものは美事なジャズを躍るもんだ」

「ほんとうです、それにしても頭の働いと云ふことが第一條件ですな」

「即ち智を鬪はすかね、ところが其智を鬪はすで面白い話があるんだ、幸運と福運を一緒につかまへた男がある」

「へえ……？ 相場ですか」

「さうぢやない、愉快な話なんだよ、奥さん……お手が隙いたら一服つけたら如何です」

岡辰老人は何か餘ほど愉快な話に思ひ當つたものゝやうに、臺所の方へ聲をかけた。

幸運の鍵

會機を捉へる

「耳寄りな話だぜ」

岡辰老人は、膝の塵を叩いて向き直つた。

「金儲けと云ふやつは、無論努力でなければならぬが、運に左右される場合が少なくないね、ところが其運と云ふ奴は誰の目の前にもぶら下つて居るんだ。それを果報は寝て待てなんて暢氣にして居る人達は、みんな見逸してしまふんだね。それを掴へて努力さへすれば、金儲けの車ははずみがついて獨りでに走るもんだ」

と、説教じみたやうな前觸れをして明るい顔をした、

「ほう、君かね、給仕から預金部へ抜擢された青年と云ふのは……」

H銀行の頭取Fは丸い眼鏡越しに若い銀行員Mの方を見た。Mは正しい姿勢で、

「はッ、預金部へ廻はされたのは今月の月初めからで、それまでは出納課から帳簿の方を受持つて参りました」

と、明確に答へた。圓滿さうな頭取の目はMの足許から頭の先まで見渡して、

「さうだつたか、しかし豪い出世だの、ところで君は何が一番得意だね」

と、訊ねた。人を使ふものゝ一番苦勞をするのは其人の持味である。長所を充分に發揮させると云ふことは、總ての場合に必要な條件である。

「はい、これと云つて別に自分が得意とするものはございませんが、只機會を捉へると云ふことが私の道樂でございます」

Mは、恥かしさうな顔をした。頭取は愉快的な顔をした。

「はッはッはッは、宜い道樂だの、しかし機會と云ふものはどんな所にあるのかね……」
それは恰度子供の智慧を掘り出すやうな興味であつた。頭取は心持ち椅子を捻ぢ向けてMの方

を見た。Mの態度は端嚴であつた。

「私は常にこんなことを考へて居ます。世間の人は運命だとか機會だとか云ふことを口癖に云つて居りますが、機會と幸運とは全然別なもので、幸福は人の力で及ばない天命です。けれども機會と云ふものは、そこいら中にゴロ／＼轉つて居る。それを巧みに捉へた人が勝利で、捉へそこねた人が愚痴を云ふのであると信じて居ります。ですから捉へさへすれば、ザラにある機會なのです。その機會を探したり掘り出したりするのが、釣より獵より面白いものだと思つて居ます」

頭取は首を傾けて居たが、何時の間にか嚴肅な顔になつて、

「宜い話だな、まあその椅子へ掛け給へ」

と、Mに椅子を薦めながら、

「そこで君は第一番にどんな機會を捉へたか……」

と、訊ねた。Mは薦められるが儘に椅子へ堅苦しく腰を下ろした。そして云つた。

「私は機會を二つに眺めます。第一には机の上に轉つて居る機會です。帳簿を受持つものは、其帳簿を完全に正確に、そして綺麗に記帳し得る機會が轉つて居ます。又出納係や窓口係、外交係を受持つ者ならば、其人の言語動作、表情等に於て客に快感を與へ得る能力を示す機會が轉つて居ます」

「なるほど、そこでもう一つの機會と云ふのは……？」

頭取の目は熱心に輝いて來た。

健實な打算

Mは膝の上へ乗せた手を其儘に言葉をつづけた。

「もう一つの機會と云ふのは極めて微妙な作用をなすもので、私から斯う云ふことを申上げてはどうかと考へますが、「價値を認められる機會」であります、と申しますのは、自分の任務の重要なことを自覺し、自らこの銀行の運命を脊負つて立つ覺悟を必要とするのです。この銀行の盛衰を自分の一舉手一投足の如何にかゝると考へて仕事に向ひます。更に銀行をして一層繁榮ならしめよう爲めには、如何したらよいかと云ふことを常に念頭に置きます。かうなると、自分は自分に當てがはれた以上の仕事を好んでやるやうになる。卑近な一例で申上げますと、紙幣の勘

定を命ぜられたならば、皺のあるものはよくこれを伸ばし、十軒の得意廻りを命ぜられれば、序に十五軒廻つて来る。紙屑が散つて居れば、自分の仕事としてそれを片付ける。即ち上から命令されたことばかりで動く操り人形式のやり方でなく、如何にも生きた脳髓の持主であるやうに、進んで大なる責任を受け、進んで困難な仕事に打つかるやうに心掛けます。しかし先程も申し上げましたやうに、微妙な點は此處にあるので、それはどんな場合でも自分の仕事の領域内で行ふことを忘れる譯には行きません。やり過ぎて内部の人達との圓滿を缺くやうであつては、却つて發展を害するものでありますから、この點に充分な考慮を加へなければなりません。

Mは自分の言葉に稍々昂奮を感じた。他から見たら赤味を帯びた頬であつたかも知れない。頭取は手を打ちたい程の感心を目の中に見せて、

「豪い／＼、その心掛けが今日の君にしたんだ。給仕から社員に採用されたもので君ほど出世の早いものは無い。これからも益々銀行の爲めに盡して呉れ。わしも出来るだけ君の信念を尊重しよう」

と、敬虔な語調で改まつた。Mは首を下げて「何分よろしく」と云ふやうな態度をした。そして彼は更に改まつた。

「時に頭取にお願ひがあるのですが……」

彼は少し云ひ難さうに言葉を濁らした。

「ほう……何かね」

頭取は愛兒の要求でも聞くやうな顔をしてMの方へニコ／＼した。

「先程私は人力を超越する幸運と云ふことを申しました。しかしこれさへも機會と同様に捉へることが出来るやうな氣がしてなりません。そこで私は考へました。あらゆる機會を捉へることに興味を持つと同様に、今度は一つの幸運を捉へて見たいと思ふのです。御賛成が願はれませうか……」

彼の瞳は燃えて居た。頭取は何か彼れの發見へ、自分の裏書が必要なんではないかと思つた。「わしの力でお手傳の出来ることなら、何でもして上げるが……」

「有難うございます。それで私は安心致しました。私は完全に幸運を捉へることが出来ます」

「さうか……しかし何だいそのお願いと云ふのは……？」

頭取はかうした健實な頭から打算される要求を、寧ろ望ましくも思つた。Mは椅子から立ち上つて、

「實はあなたの御令嬢を頂戴いたしたいのでございます」

と、力強く云つたが、流石に若き血の走る彼の心臓は泡立つた。

頭取は額へ守宮が飛びついた程にびつくりした。

幸運を捉へる

「御令嬢に異存があらうとは思はれません。あなたの御決心一つで解決する程度までの御理解がある筈でございます」

また驚きの去らぬ頭取の顔を追ひつめるやうにMは云つた。頭取は二度びつくりした。

「それでは君はもうわしの娘を知つて居るのか、そして娘との話し合が出来て居るのか」

頭取は狼狽せざるを得なかつた。若い者には油断が出来ないと云ふやうな顔をして机の上の書

類を片手でいちつて見たりした。

「はい、御令嬢はよく存じて居ります、昨日も帝展でお目にかゝりました」

「ふーむ、それで娘は何と云つて居たね」

「さあ、それは申し上げられません。お目にかゝつただけで別に何も申し上げませんから……」

「それでは前に何か話をしたことでもあるのかね」

「いゝえ、お目にかゝつたのは昨日が初めてなんでございます。ですから御令嬢の方では、私が

丁寧^{ていねい}に御挨拶^{ごあいさつ}申上げたことすら御氣付にならんかも知れません」

「あツはツはツは、さうか、つまり君がわしの娘を見染めたと云ふのだね」

頭取は安心したと云ふやうな顔をして明るく笑つた。しかしMは眞剣であつた。

「そんな浮ついた話ではありません。私の幸福と、そして御令嬢の幸福との爲に、私は斷然信じます」

「しかしそれは君一人で決めて居ることで、私の娘の知つたことぢやないではないか」

「無論です、けれども聰明な御令嬢は私の理想に必ず共鳴する筈です。あの理智的な眼、そして

落ついた態度、私

の説明を

受入れる

には應は

しい精神

の持主で

あると信

じます」

Mは熱心

である。頭

取は飽迄冗

談らしく手

を振りなが



お目か
ら
な
ぞ

ら、

「それは少し困るな、君はこんな方面へも熱があるんだね。けれどももまだ若い青年だ、大いに自

重せんけりや不可ん」

と、諭すやうに云つて椅子を卓子の方へクルリと向けた。Mは一步前へ出た。

「頭取……あなたは私の熱心な希望を紙屑のやうに扱はうとなさるのですか。それは成る程、資

本家には資本家の型があります。階級意識に操縦されねばならぬあなたの御事情はよく判つて居

ります。けれどもあなたの幸運は……いや、あなたの御令嬢の幸運は、少なくともあなたが作つて

やらねばなりません。それをしもあなたは紙屑にしてしまはふとなさるのですか……」

切々たる彼の衷情は飽まで頭取を動かさうとするのである。けれども頭取は鼻の頭で受付け

て居る。

「いや、君の熱心は買ふ……しかしわしも日銀行の頭取だ。少しは面目と云ふものも考へなけれ

ばならん」

と、云ひ切つて、机の抽斗を開けたり硯箱の蓋をしたりして、相手を逃れようと努めて居る。

Mは獨り言のやうに、

「あゝあ、矢ツ張りさうでしたか。階級思想の支配と云ふものは何時になつても解放されんものと見えますな」

と云つて自分の靴の先を見つめた。頭取は少し氣に觸つたやうな顔をして、フイとMを見上げた。そして云つた。

「わしは構はんがね、周圍のものがね、……だから君もさう云ふ了簡を起さずに一所懸命働いて呉れ。そして君がせめて専務にでもなる資格が出て來た頃に、改めて相談することにしようぢやないか……ね……君、悪く思つちや困るよ、まあ元氣を出して働くことだ。そして君が何より一番道樂にして居る機會と奮闘して呉れ」

流石は大銀行の頭取である。僅かなことにも氣を腐らせまいとする言葉に苦心のあとが見えて居る。Mもこれ以上熱願することは無駄だと思つた。

「……………」

彼はお辭儀をして其儘頭取室を出た。

なつたら、答案

それから二三日してMはD銀行の應接室にD銀行のA頭取と懇談する機會を得た。D銀行はH銀行を親銀行とした二流の銀行だつたが中商工業の機關として可なり評判の宜い銀行である。

「近頃少し閑散ぢやありませんか」

MはA頭取の顔色を見ながら話しかけた。

「しかし世間はいくらか動いて居るやうですね。これで株式界でも安定してしまつたら、どつちにか片付いて、新しい運轉が初まるでせう」

Aはどつちつかずのやうな事を云つた。

「だが残る問題は人ぢやないでせうか、株式會社も従來の積弊を暴露して、積立金を崩してしまふやら、合併してしまふやら、殆んど新しく組織されるやうなものでせう……そこで一般月給取りの諸君はどうすると云ふ問題になつて來ますね、物價が安くなるから生活は樂になりますか、月給を其儘で置くと云ふことが資本家として苦痛ぢやないでせうか」

「さあ、それは問題ですね、しかし能率が上りさへすれば人件費などと云ふものは何とか埋合せがつくものです」

「それです、其能率と云ふ奴が機械と違つて人間は氣持一つで行くのですから、宜い時は馬鹿に宜いやうなものゝ、悪いとなつたら仕末に行かんのですから」

Mは實感そのまゝのやうなことを云つてAの顔色を更にうかゞつた。Aもそれには困つて居るらしい。

「何かこの行員の能率を上げるうまい工夫がないかと、心懸けては居るのですが、賞與や俸給の鞭撻ではうまく行かなくなりましたね」

Aも何時の間にか仕事に對する痛切な研究に心を傾けて居た。Mは此處ぞとばかり乗出して、「これは現に私の方でやりましたことで非常に成績がよかつたのですが、何なら用ひて見ては如何です」

と、意味ありげに云つた。Aはそれだけでなくとも親銀行として常に尊敬して居るH銀行の内規が幾分でも聞かれることを寧ろ光榮のやうに考へて、膝を乗り出した。

「どんなことです、私の方でも是非やらして頂きたいと思ひますが……」

「懸賞募集です」

と、Mは勿體つけて大袈裟な咳をした。

「懸賞と云ひますと、何か新聞へでも廣告されるんですか」

「いや、内部です。即ち行員一同から懸賞で答案を募るのです」

「は、あ、どんなことをやりますかな……」

「第一に経費を節約する方法、第二に時間と労力を節約する方法、第三に顧客に對する便宜を改良する方法、第四に業務の繁榮策、と云ふやうなものです。それにもう一つは「なつたら答案」と云ふものをやりました」

「……なつたら答案……？ 何ですそれは……」

「つまり自分が其係になつたらと云ふのです。假令出納課が預金部の人になつたら、預金部の人が貸附係になつたら、と云ふやうなもので、頭取も之には大賛成でして、わしにも一つ應募さして呉れと云ふやうなことまで申出られました。そこで頭取には早速外交員になつたら、と云ふ課

題を特に提出しました」

「は、あ、面白いですなそれは……奇抜な回答が集まったでせうが……」

Aは首を伸ばして口元を綻ばした。

三つの成功

「集まりました。この他改良案一項に付十圓と云ふ特別懸賞もやりました。所が行員の活動は俄かに生氣を帯びて来て、夫れ々々自分の仕事に就て改良の餘地はないかと云ふ様なことを考へるやうになりました。其結果として六十種の改良案が提出されました」

「ほう……豪いものですな」

「しかしそれは何等奇抜なものと云ふのでは無く、みんな誰でも考へつくやうなものばかりでした。けれども之等の平凡な改良案でも、實行するとなつたら、業務が活潑に處理されて行くだけの効果は充分に有りました。假りに其一例を挙げれば文書係は郵税の節約方法を案出し、電報係は電文の研究と電報料の節約を考へ庶務係は文書の整理方法を工夫し、帳簿係は記帳の順序に一

寸した考案する。と云ふやうに、少くも能率増進の目的は達しました。斯う考へて見ると此募集をする迄は、行員の全部が惰眠を貪つて居たのです。夫れが一度十圓の懸賞募集によつて俄然覺醒したと云ふのです」

「なる程、そればかりではない、なつたら答案と云ふものに依つて、全然自分達の氣がつかなくなつた事まで教へられたと云ふのですな」

と、Aは共鳴した。

「さうです。いづれも参考になつたと喜んで居ます。殊に頭取の外交員になつたらなどは、銀行の眞髓を其儘に傳達した到れり盡せりのものでした」

「ふーむ、結構ですな。それを是非私共の銀行でもやりたいものです」

「しかし、これはH銀行の内規ですから私から洩れたと云ふことは絶対に祕密にして頂きたいのです」

「承知しました……しかしH銀行はあなた方のやうな熱心な人の集りですから、何をやるにもや

と、Aは獨り言のやうに呟いて、羨ましさうな顔をした。Mは一段と聲を落して、
 「如何でせう、頭取……。私を一つ働かして見て呉れませんか。少なくとも従来より一倍の能率を
 擧げて御覽に入れますが……」

と、Aの指先を見つめながら云つた。A頭取は吃驚した顔を上げた。

「何ですつて……あなたが私の銀行を希望するとは不思議ぢやありませんか、しかも第一流の銀行に信望厚きあなたが……」

「それです、私は銀行に對して一流二流と云ふ差別を持ちません、資本金が少なくとも、預金が多ければ一流ぢやありませんか、如何に莫大な資本を有して居るとしても運轉が緩慢であつては二流にも劣るぢやありませんか、要するに努力です。努力は有ゆる機會を捉へます」

Mは熱心に銀行差別論を痛撃した。Aは頼もしい顔をしてMの説明に聞き惚れた。

「そしてこちらの銀行のやうにH銀行と密接に關係を有して居る銀行でしたら、總ての點に於て大盤石です。私は希望します」

「いや、よく判りました。しかしH銀行の了解なしにあなたを私の方へ来て頂くと云ふことは出



D銀行の支配人、いや、或は常務……

來ません、いづれ其内にD頭取と會ふ機會がありますから、私の方から申出て見ませう。もし許されるやうでしたら、先刻の懸賞案を早速實行して頂きたいのですが」

Aも大分乘氣になつて來た。そしてH銀行が行つた能率増進法を今にも初めたいらしいやうに心の中で考へて居た。Mは自分の希望が半ば達しられたやうに思つたが、急に手を振つて、

「それは不可せん。F頭取は絶対にお許しになりますまい。それは却つて私から依頼することが得策です。何故なれば、私の出世の爲めなんですから、つまりH銀行の預金部員がD銀行の支配人、いや、或は常務……と云ふやうに榮轉するのだと云へば、喜んで許して下さると思ひます」

と、懇請的に説明した。Aはそれも一理あることだと思つた。

「さうなればD銀行は益々發展するでせう。發展と向上は英断から出發するものです」

Aも之には否定することが出来なかつた。Hの交渉は九分九厘のところまで漕ぎつけたのである。

「どうだ、うまい交渉ぢやないか」

と、岡辰老人は息つきに水を一杯求めた。

「へえ……？ それでM青年は成功した譯なんですね」

「成功も成功大成功さ、彼はこれで戀と名と地位とを一へんに得た譯だ」

「と云ひますと……」

「こゝで彼は一步突込んだんだ。自分はH銀行頭取の令嬢と結婚することになつて居る。そうなれば一層密接な關係が出来るから便利だと云ふのさ」

「だつて、それは嘘でせう」

「そこだよ、例の機會は……？ 彼は早速H銀行の頭取の所へ行つて、自分はD銀行の支配人に囑望された。御約束通り改めて御令嬢との結婚を許して下さい……とな」

「は、あ、兩天秤かけての機會製造ですな」

「まあ、そんな譯だ。つまり幸運を捉へる術に及第した譯だね」

部屋の電氣がぱつと點いた。岡辰老人は急に慌て出して煙草入を腰にさした。

「いや、うかく遅くなつてしまつた。金儲けの穴まで話さうと思つたんだが、またの事にしよう。今日はこれで失敬する、次の日曜にでもやつて來給へな、奥さんどうも失禮しました」

生命の革袋

岡辰の失敗

——紅梅や二軒並んで日が當る——

珍らしく風のない暖かな日である。岡辰老人はセキセイインコの籠を日向へ出して、水を替へてやつた。

「お前達はもう少し美しい聲で鳴けないかな、鈍を鑑でこするやうな聲は御免だぜ」

獨り言を云つて、大きな脊伸びをした途端に、訪ねて行つた私の姿を見つけて、

「いやあ、これは珍らしい。今日は君が来れば宜いと思つて居たところだ。何時も差向ひきりの話だが、今日は實演を一つ御覽に入れようと思つてね」

「はあ、何誰か入来しやるんですか」

「うん、保険屋が来るんだ」

「……？ 保険つて、あなたが入るんですか」

「いや、俺はもう駄目だ。保険屋の方で相手にして呉れない。悴が保険に入りたいと云ふもんだから、俺が一つ懸合つてやらうと云ふのさ」

「かけあふつて、保険料を引かすんですか」

「それは出来まい、あいつ等もいろ／＼なことを考へて居るから、協定がどうの、率がどうのつて、逃げ道が澤山あるから、率を安くしろと云つても、そいつは駄目だらう」

「それでは何かうまい方法があるんですか」

「さあ、それは保険屋が来て見ないと判らない、近頃はいろ／＼の保険が出来て居るからな」

「さうですな、月掛だの、二人保険だの、養老だの、随分いろ／＼なものがありますな」

「工夫をしないとお客がつかんもんだから、何とか云つちや、勧誘の材料にしようと思ふのさ」

「先達も何だか十二割にも廻はる養老保険が出来たつて、保険屋さんが威張つて居ましたよ」

「あツはツはツは、面白いね、しかしよく見ると利息と生命を取かへるんぢやないかね」

「さあ、それは一寸判りませんが」

「たしか震災直後だったかな、人形町の通りで俺がハンケチを買った事がある」

「はあ……」

「賣つてる奴が支那人さ、純白な綺麗なハンケチを澤山積み上げて、「一枚五銭」と正札が立つて居るんだ」

「へえ……？ 恐ろしく安いハンケチですな」

「それがね、日本人ならばバナ、賣りのやうに、戸板を引つばたいて、絶好の機会だとか、元値を無視した見切品だとか、店仕舞の投賣だとか、いろんな云ひ草をつけてやるところだらうが、生憎と支那人だけに日本語が喋舌れない。ボンヤリして居るだけさ」

と、老人は椽側へ上つて、日脚を覗いて見たが、座敷へ通つて茶を入れ初めた。

「お客様と云ふものは案外に馬鹿なものでね、何とも云はずに居たんでは、五銭のハンケチと云ふ安い品が目につかないんだね。何でも廣告の世の中だ。品が良くて安くつて、素晴らしいものでも廣告をしなければ賣れないんだね」

「全くさうですな」

「そこで其支那人も考へたんだね、手真似で廣告を初めたよ」

「へえ……？ 面白いですな」

「指で環を二つ拵さへてね、片々の手を開いてはハンケチを指さして、何か支那語で云つて居るんだ」

「は、あ、なる程、つまり錢の形を二つと云ふと十銭、片手を開いて五銭と云ふから、十銭で賣る品だが五銭でよいと云ふ譯ですな」

「さうだ、さうすると不思議なことにはみんな買ひ初めたんだ、俺もたうとう釣込まれて買はされてしまつたよ」

「なる程ね」

「さうするとそれが大失敗さ、震災に逢つた倉庫の中で蒸れたハンケチなんだ、中の方に大きな焼焦げが二つ穿いてるぢやないか」

「はてね」

「だから支那人の云ふことをよく味つて見ると、丸い焼穴が二つあるから五錢で宜いと云ふ譯なんだ、はッはッはッは、馬鹿な話さ」

「ふゝゝゝ、なるほど理窟ですな」

「そんなもんだから、保険屋の數字だつて、よく味はつて見ないとね」

玄關で鈴が鳴つた。保険屋が來たのだらう。

保険と積立

濃茶に赤い筋の通つた洋服で、オリブ色の襟飾をした保険の勧誘員は、バンドの附いた大きな靴を襖の際へ大切さうに立てかけたまゝ、恐縮を形でこしらへたやうな慇懃さで座敷へ通つた。

「いや、君が居たつて宜いんだよ」

と岡辰老人は私の方へ目顔で知らして保険屋の方へ向き直つた。

「君は本社の人かね、それとも代理店かね」

「はい、代理店ではありませんが、本社詰でございます」

人馴れた商賣ではあるが、流石に初対面の人に對しては、兩膝を並べて坐つて居る手前、堅くならずには居られない。

「保険屋と知らず女房お茶を出し、と云ふ川柳があるが、今日はこつちから頼んだんだから、お茶を上げようかね」

老人はニコ／＼した顔で茶を薦めた。

「はッ、これは恐れ入りました。どうも保険屋は何方様へ伺ひましても、鼻抓みでございます。其實先方様のお爲めで歩いて居るんでございますが……」

碎けて行く調子が流石である。

「はッはッはッは、あまりお爲めぢやあるまいが、保険屋は儲かつて仕様がないと云ふ話だ」

「いや／＼、飛んでもない話、却々儲けさして呉れませぬので……はあ」

銀のケースから、キルク口の巻莖を一本抜取つて器用に吸ひつけた。

「時に保険へ入らうと云ふんだが、料金表のやうなものでも持つて來たかな」

「はい、持参して居ります。あの、あなた様でございませうか」

「いや、俺は駄目だ。保険屋は年寄と病人は大嫌ひだとの事だから……」

「いや、これは恐れ入りました。それではどなたの保険でございませうか」

保険屋は、鼻の先で燻ぶる良を持餘ましたやうな顔をしながら、靴の中からいろ／＼なパンフレットを取り出した。

「そんないろ／＼な雑誌は要らないよ、料金表だけあれば宜いんだ」

老人は手を出したまゝ、料金表の催促をした。

「いろ／＼有利な方法がありますが、どの方に致しませう。養老の方か、有限終身か、この頃新らしく設けた二人保険とか、相互保険とか……」

「何だい相互保険と云ふのは……」

「これは相互會社の保険で、利益の配當率がよいのです」

「何だい利益の配當率と云ふのは……」

「この會社は株主と云ふものが無い、だから保険の加入者に利益の全部を配當する方法なんです」

「何で利益を配當するんだい」

「會社が投資して受けた利益です」

「損をした場合は……？」

「さあ、其は一寸申上げられませんが、完全なものに投資をするんですから、損をするやうなことはありません。例へば公債とか社債とか、確實な擔保を取つて貸すとか」

「それなら保險會社に頼まなくとも、自分がやれることぢやないか、自分に投資する知識のないものはそれもよからう、しかし俺は嫌ひだ、そんないろ／＼な名前の附いたのよりも終身が宜い」

「左様でございませう、終身なら料金も安く上りますから」

「いや安いはかりぢやない、終身保險以外に保險と云ふものはあるべき筈はないんだ」

岡辰一流の斷言法は、先づ保險屋の度膽を抜いた。

「何故でございませうか」私は横から訊ねた。

「何故つて君、保險は積金ぢやないんだからね、積金して利殖するんなら、何も保險屋を頼むにや當らないぢやないか」

「なるほど理窟ですな」保険屋も賛成した。

保険料の割引

岡辰老人は保険屋から受取った料金表を膝の上へ置いた儘、眼鏡を探して居たが、見當らないので手を打つて女中を招んだ。

「萬年青の鉢のどこへ眼鏡を置いといたから持つて来て呉れ」
吩咐て置いて更に話を續けた。

「ねえ君、終身保険と云ふものは日本へ一番最初に保険制度を布かれた時に出来たんだ、その後のいろんな名の附いたものは後から出来たんで、お客の都合を考へたり、利を持つて釣り出さうとする工夫の爲に、いろいろな数字を玩具にして出来上つたもので、つまり人間がこしらへた保険なんだ」

「終身だつてさうぢやありませんか」と私は訊ねた。

「いや違ふ、終身と云ふものは、人の死亡率から割出して作つたもので、乃ち必要に應じて生れ

た最初のものなんだよ、だから腸の内へは腸の微菌が湧くやうに、自然と具はつた方則で、云はば神様が作つたやうなものだ。抑も保険の目的と云ふものは死ぬと云ふことを保険するので、財産を作ると云ふのは少し趣きが違ふ。それを死んでから金を貰つたつて、何にもならないと云ふ様な、自分勝手な欲望から、十年掛だの、二十年掛だのと云ふ積金制度見たいなものが流行るやうになつてしまつたんだ。第一保険會社なるものゝ……」

女中が眼鏡を持つて來た。それを受取つた老人は、料金表に目を通して、

「えい……と、忤は幾つだつたな、三十一かな、三十一歳と云ふと、暮生れだつたから満三十歳だな、三十歳で終身保険と云ふと……」

細かい数字を見渡して居たが、

「おや、此頃はみんな利益配當がつくんだね」

と、呟いた。

「さうです、保險會社も勉強になりました、どれへでも利益を配當するやうになつて居ります、中にはそれの無い會社もありますか」

「ふむ…なるほど、これは尤もな話だ、君達が無理な勧誘をやるもんだから、途中で解約するものが多くなる、解約して手数料を取るの、其處分がこの利益配当となるんだな、して見るとこれも利殖投機の方則に當嵌まるかも知れない、解約者の損が繼續者の利益となる理窟なら、精解約者を作つて貰ふ方が正直な加入者には幸せなことだな……」

「つまりさうですな」保険屋は鼻の下を伸ばしたまゝ擦つたいやうに合槌を打つた。

「その代り解約者が無いと利益が無くなつてしまふなんぞは心細いな。要するに保險會社に投資の研究が積まれて來ないうちは、利益配當なんてことは僥倖と云ふより外はないな」

岡辰老人は皮肉さうな目を、眼鏡越しに保險屋の方へ向けた。

「左様ですか」保険屋はどうも仕方が無いやうな返事をした。

「時に保險屋さん。三十歳の男がこの終身保險へ千圓つけるとして、年掛けにすると幾何になるね、どうも俺にはやゝこしい數字ばかり並んで居るので判らんが、君一寸見て呉れんか、えゝ…とこれは何だ一時拂ひか、これは三十年掛と…何だか汽車の時間表見たいでどうも判らん、君見て呉れんか」

「へい、承知致しました」

保險屋は懐ろから手帳のやうなものを出して掛金表を調べ初めた。

「えい……と三十歳の終身保險と云ひますと、千圓で一ヶ年二十二圓四十錢になりますな」

「うむ、二十二圓四十錢と云ふと、平均死亡年齢が六十三歳だから、三十歳から三十四年間かけると七百六十一圓六十錢かけることになるんだね、無利息で預けたとすれば二百三十八圓四十錢儲かる譯だが、二十圓の金を七分の金で複利にして三十四年間据置くと百九十九圓五十六錢二厘となる、二年目の廿圓が三十三年で百八十六圓五十五錢六厘、三年目の二十圓が三十二年で百七十四圓三十錢六厘、四年目の二十圓が三十一年で百六十二圓九十錢二厘、五年目の二十圓が三十年目に百五十二圓二十四錢六厘、六年目の二十圓が二十九年目に百四十二圓二十八錢六厘と合計千十七圓七十錢八厘となるから六十三歳で死ぬとすれば二十圓つつ六年かけて置けば宜いことになるね」

「それはさうです、然し保險は加入されて其翌日亡くなられても、千圓の金を差上げなければなりません」保險屋は冷笑したい口元で岡辰の顔を見成つた。

「さあそれだ、それが保険の保険たるところだよ、ところでどうだい君、五圓ばかり負からないか」

「えッ……」保険屋は急に目を丸くした。

岡辰式計算

「あッはッはッは、驚いたね、組合の協定があるから困ると云ふんだらう」

岡辰老人は一通り目を通した料金表の中から、何か発見したらしく、保険屋の驚いた顔へ笑ひかけた。

「いや、これは恐れ入りました。御冗談は御冗談として、それでは兎に角醫者を寄越しますから、一應お身體を拜見さして頂きます」

保険屋は流石に商賣である。もう決定したものにして、鞆のバンドを締め初めた。

「おつと一寸待つて呉れ、冗談ぢやないよ、云ひ値つてことは無いよ、俺も只負けて呉れとは云はない、君の方でも何分か色をつけて呉れんか」

保険屋は眞面目になつた岡辰の顔を見て、呆氣に取られて居たやうだつたが、急に笑ひ出して、

「えッへッへッへ……何もかも御存知なんですから敵ひませんや、兎も角醫者をよこします」

相手にしない。岡辰老人は手を振つて、

「ほんとうに笑ひごつちやないよ、負からなければ約束出来んぜ」

と、はづした眼鏡を机の上へ乗せて炭を繼ぎ足した。保険屋も少しムキになつた。

「いや、しかしそれが眞實だとすればお約束出来ないことになります。保険料を割引して取引すると云ふ所は、世界中鐘や太鼓で探したところで有りませんからな」

「だからさ、全然負けて呉れとは云はんよ、當方でもするだけのことはするよ」

「夜店の襯衣のやうな譯には参りませんな」

保険屋は癩に障つたと見えて、聞えないやうな聲で獨り言を云つた。

岡辰老人はニヤ／＼笑ひながら、

「君も案外商賣氣の無い男だな、さあ茲に鉛筆と紙があるから、三十歳になる男の終身保険を書き出して見な、算盤もこゝにある、仕方がない君の云ひ値で申込んでやらう」

と、机の上から算盤を出して、保険屋の前に置いた。保険屋は急に活氣づいたやうな顔をして、しまひかけた鞆の中からまたいろく／＼なものを取出した。

「はッ、有難うございます。三十歳と云ひますと、先程も申上げたやうに、千圓で二十二圓四十二錢、一萬圓なら其十倍でございます」

「よし判つた、そこで其二十二圓四十二錢とそこへ鉛筆で書いて見な、それからこれを一時拂にするに幾何になるね」

岡辰老人は眼鏡をかけて覗き込んだ。

「一時拂でございますか、一時拂だと三百六十一圓九十錢でございます。この方があとの世話がありませんし、六年目には利益の配當がついて來ますから、しまひには大へんな金高になります」

「ふむ、三百六十一圓九十錢を六分の複利で計算すると三百圓の金を据置にして二十一年目に千九百八十八錢になるから、ザツと二十年で千圓餘りになる。して見ると五十歳までに死ななければ損になる勘定だな」

岡辰老人は獨り言のやうなことを云つた。

「いや、利益の配當が約二百二十圓程ついて行きますから千二百二十圓になる勘定です」

「だつて其利益と云ふ奴は責任ぢやないんだから殖えたり減つたりして當てにはならんよ」

「しかし、大抵十分の七見當は責任が持てませう」

「持てませうが心細いな、まあ宜いや、そこで、君の所では加入者に保険證を擔保で金を貸す筈だね」

「え……？」 保険屋は躓いたやうな首を上げた。

「一時拂ひをして、其證券で金を貸す規定がある筈ぢやないか」

「へい、ございます。解約金の八割まで貸す事になつて居ます」

「さうか、して見ると三百六十一圓九十錢の金をかけて、解約金の八割を貸すとしたら、幾ら借りられるんだい」

「左様、二百四十圓ほどお貸しすることが出來ます」

「うむ、それは一寸困るな、一時拂なら、思ひ切つて其全額の八掛貸して呉れんか、全額の八掛と云ふと、三百六十一圓九十錢へ八掛ける、二百八十九圓五十二錢、さうすると契約の日に君へ

やる金が、七十二圓三十八錢あれば宜い譯だ」
「なるほど」保険屋は首を曲げた。

生命の借金

岡辰老人は胡坐をかき直して黒飴を一つ頬張つた。
保険屋は暫く目をパチパチとやつて居たが、

「二百四十圓をお貸しして、あと毎年半期に八圓七十六錢づつ利息を頂戴して行くとすれば、利益の配當が六年目毎に加算されて行きますので八十一歳まで御長命になると借りた金がファイになつて、四千四百三十三圓の金を差上げるやうになります。これなら正規の手續きでよろしいのです。お引受け致しませう」
と得意になつて少し反つた。

「あつはツはツは、考へたね、うまいよ其算盤は……つまり二十二圓四十錢づつ毎年掛けて行くのを一時拂ひの借金にして半期に八圓七十六錢づつ一ケ年に十七圓五十二錢かければ、八十一になつて四千四百三十三圓になると云ふのだらう、豪い、君は却々頭が宜い、掛金が安く見えて取り高が多く見えると云ふんだから……ねえ君……」
と私の方を見て、

「先刻のハンケチ屋さんだね」と、微笑した。

「一寸面白い方法ぢやありませんか、薄給の人なんかなら便利ですな」と私は合槌を打つた。すると老人は大袈裟に首を振つて、

「いや、これは駄目だ、結局精算すると二十三圓五十二錢三厘五毛の掛金になるから、規定のものより一圓十二錢三厘五毛だけ高くつく、さうだらう君、全額の六分五厘の利子を拂はせられるんだから……そんな算盤を立てるやうぢや奉仕が無い、自分の算盤だけを弾くと、他人様は振向いて見ないもんだよ」

保険屋は老人の暗算にビックリした。

「さうしますと、どうすればよろしいんですか」

「さあ、俺のはね、先刻も話したやうに全額の八掛を借りて、あとの残金は即座に支拂ひ、其八

掛の二百八十九圓五十二錢を君へ無利子の條件で月賦拂ひをしようと云ふんだ。會社が出来なければ、代理店の君として立替拂をやるんだ」

「さあ、立替は一才困りますな」

「だつて君、規定通りに行つたところで六十日の延滞は宜いだらう、君が其金を集めて、會社への納金も六十日は宜いとして、君と二人で四ヶ月は何とかなる。だから正直に掛て行く人を三人作れば利子なんか一文も要らずに済む筈ぢやないか、どうせ俺のところ一軒で君の代理店が立つ譯ぢやなし、澤山ある得意の中だ、甲の入金で乙の分へ入れたつて會社は何とも云ふ筈はないよ」

「なるほど名案ですな」

私は乗り出した。常に岡辰老人が云つて居る通り、利子の計算より、途中の手續きに儲けがあると云つて居たが、茲のことだと思つた。會社が半期に利子を取るのも、半年分の利子を生み出す巧妙な手段なのだ。しかし自分達のやうに、保険へ入るにも今の所ではどうすることも出来ない身分だつたらどうすれば宜いだらう。今迄は保険のホの字も考へて居なかつたが、こんな場合にはどうしたものか。一寸聞いて見たくなつた。

「私達のやうに。一時拂をしたくとも出来ないものはどうしたら宜いでせうかな」

「さうだね、何かうまい方法があるかも知れないぜ」

岡辰老人はまた黒飴を一つ頬張つて考へ初めた。保険屋は呆氣に取られたやうな顔をして、料金の数字を棒のやうに見つめて居た。

九十九錢て千圓

聽て老人は黒飴をコックリと嚙み込んで、

「ある、あるよ君、月掛保険と云ふのがあつたね、あれを先達の三年貯金のやうに、別の銀行へ入れて置いて、半期拂ひをやるんだ、それなら資本のないものには屹度宜いかも知れない。しかし月掛は年掛より率が高くなつて居るだらうな」

「え、率はすつと違ひます」と保険屋は云つた。

「それでは駄目だ、待てよ、君は幾つだつたね、矢張り三十歳か、それでは悴と同じ年だ、恰度宜いや、かうツと……」

暫く天井を見つめて居た岡辰老人は、ボンと小膝を叩いて、

「ねえ、石の上にも三年と云ふ例へがある、最初一時拂が出来なければ、仕方がないから年掛でやるんだね、そして三年なり五年なり経つうちに、一時拂が出来るやうな機会が来ないとも限らない。その時に一時拂に直すんだよ」

「なるほど、さうすると、三年なり五年なり掛けた金が加算されて、負擔が軽くなると云ふ譯ですな」と私は膝を乗り出した。

「さうく、だから今君が加入するとすれば二十二圓四十錢つつ五年掛ける、さうすると百十二圓掛けたことになる、そこで三百六十一圓九十錢の一時拂に直せば、あと二百四十九圓九十錢の掛金をすればよいことになる」

「なるほど」保険屋さんも少しやゝこしい計算になつて来たので乗り出して来た。

「そこで八割前借をやるんだね、すると先刻會社の規定だと云ふ二百四十圓にしても、差引すると金九圓九十錢足せば一時拂が出来てしまふ譯だ」

「はゝあ、なるほど……」私もうなつた。

「九圓九十錢で千圓の保険に入れるなんて嘘のやうな話だね」

しばらく感嘆して聞いて居た保険屋は目と鼻とをくいやくさして鼻の下を伸ばしたかと思ふと、動き出した電車を追かけるやうな調子で、

「ちよつと待つて下さい、五年掛けて六年目に一時拂ひをする、すると利益の配當は其時からするのでせうか」

岡辰老人は腹の底から笑ひ出して、

「はッはッは、それは君の方で計算することだ、俺は保険屋ぢやないんだから……」

「なるほど……」保険屋は氣がついたやうに、頭を掻きながら苦笑した。

「君の方の規則から行くと當然だね」

岡辰老人は勝誇つたやうに見下ろした。保険屋は少し面喰ひながらも、何とか目鼻をつけなければならぬ問題である。

「しかし……何ですな、五年掛けて六年目に一時拂をするとすれば、前のは解約する形式になりはしませんかしら……」と保険屋は恐るゝ首を曲げた。老人の微笑は尙ほ続く。

「さうか……しかし假りに俺が年掛で加入して居たとして五年目に米國領事館附とか何とか云ふことになつたら怎するかね、五年も十年も日本へ歸れないんだから、毎年掛ける譯には行かない、一時拂にして置くと云つたら、それでも解約の形式と云ふ譯には行かんぢやないか……」

「なるほど」保険屋はまた首を曲げ直した。

鐵瓶が突然チーンと鳴り出した。岡辰老人は慌て、蓋を取つて中を覗いて見たが、水差しの水を少し注いで、

「ねえ、君これは研究問題だと思ふんだ。強ひて理窟をつけて云へば、五年の間保険して居たんだからと云ふだらうが、保険を廢すと云ふんぢやなし、洋服屋なら月賦の掛金を一時に拂ふと云ふのに、前のはあなたが散々着たんだから、損料として計算し、一時に拂ふなら全額貰はなければと云ふ理窟はない筈だ」

と勝誇つたやうに鼻を大きくした。

「全くさうですな、しかし、もう一つ茲に問題がありますね」と私は坐り直した。保険屋は戸迷

ひをした、鶏のやうに、老人と私の顔を見比べた。

「何だね、問題と云ふのは……」

「假りに五年目に解約の手續きをしたとしても、六年目に新しい取引をするやうにするとすれば、最初三十歳の料金だったものが、三十六歳の料率にしなければならぬ筈です、それを先刻あなたは矢張り三十歳の料金で計上して居ましたね」

「え、それは宜いんです、明治生命なんかではそれで差支ないと云つて居ます」と保険屋は簡単に片付けた。

「それなら尙更ロチックに合はんね。もしそれで宜いとすれば千圓に對し三十歳の二十二圓四十二錢と三十六歳の四十一圓七十六錢の掛金では、差引十九圓三十六錢と云ふ利益が生れて來ます」

「なるほど」保険屋はまた唸つた。

岡辰老人は、晴々しい顔で笑つて、

「これは契約者間の手心だね、やつて出來ないことはない。それより茲に七分三厘か八分に廻る社債でも買ふことだ、保險會社の利拂は六分五厘見當だから、最初の一時拂ひで貸付を契約し、

借りた金で七分五厘位の社債か株券を持つて居れば、差引一分の利益が生れる」

「なるほど」

「その一分の利益を貰ひながら、八十一まで五十二年の長壽を保てば、借金が何時の間にか無くなつて、保險會社が計算する四千四百三十三圓の金が貰へる。假りに平均死亡年齢の六十三歳までとしても、三十三年間あるから今の利益配當率で行くと借金を返して尙ほ且つ二千二百五十九圓の金が貰へることになる。どつちにしても保險は株や米のやうな譯には行かんが、死んで金の取れることは疑ひなしだ」

と、岡辰老人は話を結んだ。

「いや、いろいろ有難うございました」

保險屋は解放されたやうに物とした。

「まだ申込みの判を捺さなかつたね」

老人は笑つた。

「さう／＼、あまり参考になる結構な話を伺つたもんですから、商賣の方を忘れてしまひまし

た」保險屋は頭を搔いた。

「兎に角醫者をよこして呉れ給へ」

「へッへッへッへ、いや、これは逆襲ですな、恐れ入りました」

保險屋は逃げるやうに歸つて行つた。

「ねえ君、あれだから困るよ、數字の踊りを知らないんだから……」

と老人は苦笑した。

「客と接渉する人にはいろいろな方法を教へて置く必要がありますな。あなたが前の方で御加入になるんでしたら、私は後の口で加入します」

「ほう、あいつ幸福な奴だ、茲で二人こさへたね」

黄金五重奏

眼の着け所

「大分宜い陽氣になつたな」

岡辰老人は明るい障子の陽ざしへ獨り言のやうに云つた。

「すつかり春ですな」

と、私も外へ目をそらした。

「静乎としては居られないな」

「さうです、働きたい氣が動きますな、しかし斯う世の中が行きつまつては、何をするにも張合がありませんよ、結局懐ろ手をして居る方が勝なんですからな」

「はッはッはッは、君も随分燒きが廻つたな、いまどきの若いものがそんなことでどうする。何を
をするつたつて今が又とない時機だ」

「えッ、この不景氣がですかい」

「さうさ、君は不景氣々々つて云ふけれども、金儲けと云ふ奴は不景氣の時に限るもんだ、まあ一寸考へて見ると景氣の宜い時に十の力が要るものなら、不景氣の時は五の力があれば宜い譯だ
な」

岡辰式逆説がそろく首を擽げ初めた。

「五の力と云ひますと……」

「さうぢやないか、景氣が宜いとみんなはち切れさうな元氣で精一ぱいの働きをして居る。それに引換へてこんな不景氣な時節には、みんなへろくして居る、へろくして居る人間と取組んで、ヨイシヨとやりやあ、勝つにきまつてるぢやないか、どうだ一つ廻禪をぐめて、四股を踏んで見る氣はないか」

「へえ……？ そんな宜い土俵があるんですか」

「はッはッは、土俵はよかつたね、お希望とあらば呼出しの役を承つても宜いがね」

老人は例の黒飴を一つ頬張つて、何か考へて居るやうだつたが、聽て小膝をボンと一つ叩いて、

「もうそろ／＼初めても宜いころだらう」

と、呟きながら鐵瓶へ水を注した。

「初めると云ひますと、何かポロい商賣ですか」

「ポロい商賣……」

岡辰老人は目を丸くして私の顔を見つめたが、

「そんな了簡を起しちや困るね、此世の中にポロい商賣なんて云ふものがある筈はない、それを狙ふ人は澤山あるやうだが、それは一ト皮剝くと泥棒見たいな了簡の奴ばかりだ、泥棒だつて君ポロいとは云はれないぜ、一ト頃評判だつた説教強盗の稼ぎ高を克明に勘定した人があるが、あれでも日當四圓三十何錢にしかつかなかつたさうだ、それが二十年の懲役と來て居るのだから、これを加算して日當を割り出すと、日本の數字では現はすことの出来ない細い日當になつてしまふ。人のものを只取る仕事でもこれだ、況して商賣と名のつくものにポロいなんて云ふものがある筈はないよ」

と、眞剣に戒めるのである。これには如何なことでも抗辯することは出来ない。岡辰老人は入れ替へた茶を薦めながら、

「只、人の氣のつかないところへ着眼すると、着眼料として意外な儲けがある、それをポロいと云へば云ふんだがね」

と、云ひ過ぎた叱言を緩和させるやうな調子で、口元を綻ばした。

「例へばあの繪葉書だね、あれは銀座の玉木額縁店が外國から輸入したのが初まりなんだ、ところが其當時は日本人にさうした趣味が無かつたんだね、こんな小さい繪は必ず賣れるだらうと考へたのは宜かつたが、一錢五厘で濟む葉書を五錢も十錢も出して買ふ奴があるかいと云ふやうな人ばかりで、取扱つて呉れさうな店は一軒もない、仕方なしに懇意な洋品店へ頼んで、店頭へ並べて貰ふと俄然好奇心を唆つて賣れ出した、其内に日露戦争が初まる、美人の繪葉書が賣れると云ふやうな譯で今日の盛大をなしてしまつた。これなぞは品物にポロい利益がついて居るのでなく、着眼に素晴らしい利権がついて居るのだ」

「なるほどね、今日では繪葉書専門の店さへ出来て居ますな、何かさうしたうまい掘り出しものは無いでせうか」

「さあ、そこだて…最初考へたものがうまく行かない、それを努力で掘出した、それで安心してしまふから駄目なんだ、もう一度掘出す勇氣がなくては金儲けの真髓には觸れて来ないな」

「へえ…？して見るとまたうまい方法があるんですか」

「それはある、しかし繪葉書のことを話したからつて此呼吸は何商賣にも應用されることだよ、俺は君に繪葉書を薦めて居るんぢやないからね、應用さへうまくやつて呉れれば、何だつて當嵌まるものだ」

と、岡辰老人は懐ろから手巾を出して鼻をかんだ。

金儲方程式

「たとへば今の繪葉書だね、外國から持つて来たのは玉木額縁店だが、日本で最初の繪葉書をこしらへたのは上方屋だ、これは即ち考へたんだね、時恰も日露戦争の時だった、血氣な日本男兒

を慰安するのは何がよからうと考へた結果、裸體美人に聯隊旗を持たした寫眞を取つて繪葉書を作らせた。その美人は上方屋の娘さんださうだが、これが受けたんだね、素晴らしい賣行きなんだ、それから魔風戀風の寫眞を作る、藝妓の繪葉書として淺草の榎家小ゑん、赤坂の萬龍と云ふやうなものが歡迎される、忽ちにして繪葉書屋は大繁昌、それから遞信省が記念繪葉書を作ると云ふやうに應用されて来た。全國の名所繪葉書などと云ふものは、無くてならないものゝやうになつてしまつた」

「その代り錦繪などと云ふものはすつかり廢つてしまひましたな」

「さうく、それは繪葉書に應用化されてしまつたんだ」

「時勢ですな」

「そこだよ、日にく進む時勢と云ふものがいろく金の儲けを教へて呉れるんだ、もし俺が繪葉書屋だつたら、活動寫眞の俳優や、風景だけで満足して居られないね」

「へえ…？どんなことをやりますな」

「時事繪葉書と云ふものをやる」

「それはいまでもやつて居るぢやありませんか」

「それがさ、新聞社と聯絡を取つて、其日の出来事を直ぐに繪葉書にして賣り出すんだ、近頃百貨店の飾窓などでは、大きく飾つてあるやうだが、いつ見ても眞ツ黒な人集りだ、この人達にあの寫眞の繪葉書を見せたら、其うちの何割かは買ふだらう、例へば郷里元の母へ手紙を出す、今朝の新聞に出て居る首相の演説振りを直ぐ繪葉書で知らす、商人がお得意へ新製品の通知を出すにも、今朝の火事が寫眞になつて飛んで行くと云ふやうなことになれば、またしても廣告だと云

時事寫眞特報



つて讀まずに捨て、しまふやうなことはあるまい。汽車が衝突した。直ぐに繪葉書で無事を知らせるなんて云ふことまで出来るやうになつたら、屹度素晴らしい商賣になるだらう」

「なるほどね、何とか法案通過の一刹那と云ふ議會の場面を即座に有権者へ送ると云ふやうなことは注意を惹きますな、それに外國へ立たうとするときは、波止場か船上の姿を出張撮影として禮狀代りに出す、……いろくゝな利用法がありますね」

「専門の人がそれ／＼考へたら、まだくゝいくらもあるだらう、即ち茲が利權の生ずるところで、他人がやつて成功した、それをもう一つ考へる、今度は自分の利權になる、面白い世の中ぢやないか、これに就いて今日は一つ金儲けの呼吸を考へて見るんだね」

「結構ですな」

「と云つて何から初めようか……」

「私達にも出来さうな名案がありませんかな」

「ふーむ……」

岡辰老人は鼻の穴をふくらしましたが、

「さうく先刻話さうと思つて居たのだが、何時の間にか繪葉書屋の話になつてしまつたんだ、いつか君と一緒に銀座でソーダ水を飲んだことがあつたね」

「はあ、去年の暮でしたかね」

「さうだつたかな、あのカフェーさ、あれに就いて面白い話があるんだ、これは今から俺が話さうとする大金儲け方程式の前口上なんだから、身に染みて聞いて貰ひたいんだ」

「はあ……カフェーを初めるんですか」

「さうぢやない、カフェーの出来ごとなんだ。何しろ區劃整理以來、東京もすつかり變つてしまつて、須田町などへ行つて見ると、廣瀬中佐の銅像が何處へ行つてしまつたか判らないやうになつてしまつた。大したもんさ、道路を充分に取つて明るい町になつたね、其代り昔と違つて向う三軒の親しみがなくなつた。兩隣たつて鐵筋混凝土になつてしまつたんだから、拳骨で壁を叩いた位ぢや話も出来ない、變れば變るもんだね」

老人は恐ろしく感嘆して置いて、炭團の灰を搔き落しながら、

「三軒長屋の出来ごとさ」

と火箸を灰へ突き差した。

宣傳時代相

「右の端が洋食屋、綺麗な女給を五六人置いて、洋酒類一切取揃へてあると云ふ氣の利いたレストランだ、二階は一寸した別室があつて二十人位の宴會なら出来ようと云ふ、左の端が支那料理、北京とか廣東とか云ふやうなもの、日本人の好みに合ふやうな献立で大勉強さ、眞ん中が俺の舊い友人でブラジルに永く居たことのある男だ、この男は珈琲を焙ることが得意で、素晴らしい珈琲を呑ませるぞ、何しろ南米に十年足らずも居たんだから、珈琲の事なら實に委しいもんさ、何時だつたかな、いまから十五六年前の事だが、ブラジルから珈琲を只でよこして、日本へ珈琲宣傳をやつたことがある、その時分に南米に居た男なんだ」

「は、あ、珈琲通なんですね」

「さうだ、其男がカフェーを初めたのさ、そして南米一流の無代提供と云ふ奴をやつたんだね」

「只で吞ますのさ、つまり宣傳だね、米國あたりでもチョコレートの宣傳をやる時は五歳から十歳までの子供にはチョコレートを幾らでも只で呉れたもんだ」

「へえ……？ よくそれで引合ますな」

「それが米國一流のところさ、コ、アと云ふもの一つの中毒性を持つて居る、五つや十の小供に中毒を起さして了ふと十一からは買つて食はなければならぬ、また食はずには居られない、五年の無代提供はそれから四十年も五十年も買はずには居られなくなると云ふんだから、算盤を弾くと大へんな儲けになるぢやないか」

「なるほど、面白い宣傳ですな」

「日本でも鐘紡の社長さんだつた武藤山治さんが力行時代に、醬油をアメリカへ持つて行つたことがある、一寸した容器へ入れて賣り出したところが馬鹿に賣れる、めめたと思つて後荷を電報で取寄せたものさ」

「は、あ、ソースの國へ醬油とは思ひ付でしたな」

「日本からは澤山な醬油が積込まれた、武藤さん大ニコくで、さあ今度はどんなに注文があつても大丈夫だと云ふので向ふ鉢巻甲斐々々しくやつたものさ」

「愉快ですな」

「ところが今度はバツタリ賣れなくなつてしまつた、いろく調べて見たところ、米國人は醬油が欲しいのではない、容器が珍らしいから買つたんだ、いくら珍らしいからと云つても、二つも三つも必要はない、そこで賣れなくなつてしまつて大失敗さ」

「つまり見當違ひだつたんですね」

「さうだ、そこが日本人の缺點さ、元來日本人と云ふものは醬油に中毒して居る、醬油がなくてはどんなものでも甘く食べられないやうになつてしまつて居る、だから米國へ醬油を賣り込むのなら先方の人を中毒さしてしまはなければ完全とは云はれない」

「なるほど、徹底的ですな、そこで珈琲なんかも只で吞ますと云ふのですね」

「その通り、珈琲と云ふものは口へ合はすに却々骨の折れるものださうだ、そのコツをすつかり呑み込んだのが例の男さ、開店早々大へんな客でね、目の廻るやうな忙しさだつたさうだ」

「さうでせう、只でうまい珈琲が吞めれば、これほど繁昌することはないでせう」

「ところが人間と云ふものは現金なもので、いくら宣傳だからつて、さうく只でばかり吞ます譯には行かない」

「御尤も……」

「一杯五錢と値段書が出るとパツタリ来なくなつてしまつた。其の中でほんとうの珈琲通だけがポツリ／＼と来る位なもの、實に呆れた話さ」

「はツはツはツは、ありさうなことですな」

「それに引代へて隣りのレストランは大宣傳大勉強と云ふのだ。文化の味覺はカクテルへ」とか、「一日の勞苦を忘るゝワンカフエー」とか、モダンどもの好さうなポスターをベタ／＼貼り出して、夜になると挑發的なジャズだ、何とか行進曲とかなんとか云ふものを人氣作家につくつて貰つて女給達に唄はせる、大へんな騒ぎさ」

「宣傳時代ですな」

「全くだ、左隣りの支那料理もこれに負けて居られない、初つたね……」

成功疑ひなし

「競争ですな」

「さうく、先づ入口にネオン瓦斯の赤色電燈で「榮養第一 廣東御料理」と現はして、女給は悉く支那服だ、「先づ健康は榮養から」と大きなポスターを掲げて招込みは支那樂の自働樂聲器さ、今晚の曲目はお馴染のキヤラバン」と云ふやうな貼り札を出して大童だ」

「大へんなものですな」

「すると右隣りの洋食屋は廣告ビラ撒きを店頭へ立たして通行人に一々手渡しする」

「なるほど」

「左隣りの支那料理も同じ様な廣告を撒く、しまひにはビラ撒同志で取組合ひの喧嘩を初める。通行人が立止つて見る、一人立ち二人立ち黒山のやうな人集りになると、支那料理ではキヤラバンが初まる、洋食屋ではジャズが初まる、喧嘩が何時の間にか無くなると立つて居た人の中から何人かは兩方の料理屋にこぼれ込む」

「うまい手ですな」

「考へたものさ、それに引換へて可哀さうなのは眞ん中のカフェーだ、自慢の珈琲を賣物にして腕を叩いて威張つては見るが、兩隣りの宣傳競争にすつかり火を消されたも同然、ペシヤンコになつて青息太息と云ふ有様さ」

「困つたでせうな」

「困るもこまる大困りさ、俺が訊ねて行つたら、流石勝氣な彼奴もすつかり青菜に鹽だ、何とかうまい工夫はないものかつて、弱音を吹き初めた。だから俺は笑つてやつた。腕や手先を自慢にした鼻ツ張りの強い商賣は今時流行らない、何でも宣傳の世の中だ、思ひ切つた宣傳をやれつて云つたのだが、先刻話した通り、只呑み連中に一杯食はされて居るもんだから、宣傳はもう懲り懲りだと云ふんだ」

「なるほど、これも理窟ですな」

「そしてまだ彼奴の云ひ艸が宜いんだ、東京廣しと雖も、珈琲をうまく吞ませる店は俺の店を除いて他にはないんだ、それを知らないと云ふのは、未だほんとうに珈琲の味を知つて居る奴がない

證據だつて、諦めたやうな負けしみのやうなことを云つて居たよ」

「しかし、事實ほんとうの珈琲通と云ふものは無いでせう」

「それはさうかも知れない、と云つて蜘蛛の巣だらけの店を抱へて憤慨ばかりして居たところで初まらないや、そこで俺は云つてやつた、ほんとうにお前が甲を脱いで俺に頼むと云ふなら俺が一つ繁昌さしてやるがどうだとね」

「一流の祕傳ですか」

「いや祕傳と云ふ程でもないが、あんまり氣の毒だからね、何とかしてやるのも友情の一つだと考へたんだ、すると其男は鼻の先でせつら笑つて、株や米ならどうかも知れないが、商賣は道に依つて何とやら、まあ此儘にして置いて呉れつて云ふのさ」

「何か素晴しく金でもかゝると思つたのちやありませんかな」

「俺もさう思つた、だから君はそんなことを云ふけれども、一文の費用もかゝらずに、お容を招ぶことが出来るなら、やつて見て無駄だつたところでもとくちやないかつて云つてやつた」

「ふむ、ふむ……」

「すると大將急に眞剣な顔をして頼むと云ふのさ、はッはッはッは、現金なものさ」

「ふむ、ふむ……」私は乗り出した。

「そこで兎に角明日は必ず千客萬來にして見せるから珈琲をうんと準備して置けと云つて其日は歸つた」

「ふむ、ふむ」

「翌る日の午後四時頃に行つて見ると大へんな人だ、眞ッ黒な人山さ」

「へえ……？ それはまたどう云ふ譯なんでしょうございます」

「あッはッはッは、これが即ちコツと云ふ奴さ、このコツを呑み込んで置きさへすれば何をやつても成功疑ひなしと云ふのだ」

口の廻りに微笑を色づけた岡辰老人は、細い目をして私を見た。

材料の研究

「どうだい忙しさうだね、と裏口からこつそり入つて行くと、珈琲屋の親爺は目を丸くしたまん

ま俺の顔を穴の穿くほど見つめて居たが、どうも不思議だ、何かおまじなひでもしたのかと云ふのさ、はッはッはッは、おまじなひは宜かつたね、事實お呪ひに違ひないんだから……」

「へえ……どんなお呪ひなんです」

「ふ……、君までそんなに聞きたがつては困る、それよりか珈琲屋の親爺の方が其祕傳を知りたがつて居るんだ、兎に角折角のお客様に間をかゝしては不可ない、ドシ……運ばせると云ふので、店の方へかゝらせたが、餘ッほど氣になると見えて親爺さんはおちくくして居られない、間を見てはやつて来る、話してやらうと思ふと客が来る、大へんな騒ぎさ、漸う……のことで一寸客が切れたので、額の汗を拭きながら、親爺さんが何遍も何遍もお辭儀をしたよ」

「無理ありませんな、昨日までひつそり閑として居た店が、急に大繁昌と來たんだから、感謝するでせう、そこでそのお呪ひの一件は……」

「それがね、其親爺も頻りに訊んだ、けれども別に大仕掛なものぢやなし、そんなに知りたければ教へてやらうと云つて其親爺を表へ連れ出したものさ」

「ふむ、ふむ」

「左隣りも右隣りもポスターや立看板や、旗で大へんな景氣だ、その真中にはさまつた薄暗いカフェーは、丸い電燈がたつた一つ、その下へ持つて行つて、入口はこちらと書いて置いたのさ」
「なあゝるほど、両方が宣傳をして人を集めたところを「入口はこちら」か、はッはッはッは…こいつは妙案ですな」

「ねえ君、これだよ金儲のこつは、金儲け須らく入口はこちらでなくてはならない」

岡辰老人はケロリとした顔をして茶を一口呑んだ。

「なるほどね、一人々々の努力では多寡が知れて居りますな、人に働かして置いて入口はこちらか…なるほどね…」

止めどなく感心する私の顔に笑ひかけた老人は、

「その入口式材料の研究だがね」

と云つて、机へ片腕を凭せた。

「何かありますかしら…」

「ある、それは株だ」

「へえ…？ 株がどうして入口式なんです」

「だつて君さうぢやないか、株式會社の株券と云ふものは、誰が持つても宜いやうに出來て居る、そして社長とか取締役とか支配人とか、頭の宜い連中が渾身の智慧を絞つて利益を計つて居る。その利益の配當は即ち入口はこちらなんだ」

「なるほど、さう云へばさうですな、しかし或る場合は入口が彼方になることもありませぬかな」

「それはほんとうの株持ちぢやない、株の値段と云ふものを標準にして博奕をして居るものゝ方にあることだ、あゝ云ふ風に値段の騰落が賽の目のやうに變るものだから、賣りと買ひとの二夕目を利用して、策を伏せては開けて見る人が多い。人間に勝負事はつきものだと云ふけれども、眞剣な事業を賽ころと考へて居るやうな不届きものゝあるうちは、日本の財界も發展しないね」

「しかし事業そのものを玩具にして居る實業家も多いぢやありませんか」

「全くだ、賽ころへ仕掛けをして素人衆の金を捲上げるいかさま師と少しも變りのない實業家もあるね、こんなものに引掛かると、身も蓋もなくなつてしまふ」

「だから株へ手を出すものは一割か二割の信用を落してかゝると云ふことになるのですね」

「は、そんな馬鹿なことがあるものか、少なくとも株を買つたり賣つたりしようとするものは、その株の種や仕掛を見透すだけの知識がなければ駄目だ」

「それが難しいことですか……」

「いや、決して難しいものではない、何時か君に話したが、それには立派な浄玻璃の鏡がある」

「はあ……？ 何でしたっけね、それは……」

「あれツ、もう忘れたかね、困るなども……」

机からゆんらりと身を起した老人は、あれだよと床の間の方へ指した。

八方睨み

床の間には老人自慢の一軸、可なり時代のついた兆殿司の達磨、八方睨みの瞳の配り、全くよ
い出来である。置物は白象に牧童の香爐、投入のえにしだが無雑作に、いつそ趣きが出て居る。

「八方睨みですな」

多分それだと感じた私は、達磨の眼と老人の顔を見比べた。すると老人は急に笑ひ出して、

「はツはツはツ、八方睨みは宜いね、全くその通りだ、しかし俺の云ふのはそれと違ふんだ」

豈夫白象の置物ではあるまい、それとも投入の……考へて居ると、

「判らんかね、これだよ」

老人が立上つて床の間の方へ立つて行つたが、隅に重ねてある新聞を二三枚無雑作に持て来た。

「これだよ、有難い御時世さ、世の中の事が裏の裏まで判るやうに、毎日配達されるんだから、

今時の人はもつと利巧にならなくつちやならないんだが……」

と獨り言のやうなことを云つて、

「新聞を一通り目を通して置けば、いかさま事業と云ふものは直ぐに看破ることが出来るやうになつたんだから、株を危険だと恐れて居る時代はもう遠い昔になつたよ」

何のことだ、勿體つけて大仰な種明しでもするやうな様子をして、今更ら新聞の講釋と……は少し侮辱を感じた私は、少し残つて居る茶へ湯をさして、ふうふう吹きながら呑み初めた。

「ねえ君、新聞で株のことを知るとすれば、夕刊の相場欄だけだと思ふと大間違ひ、朝刊の經濟

欄から、政治面に至るまで、一通り目を通して置かないと不可い、これ等のことは孰れあとで委しく話すと、株の値段を見て御覽、淨玻璃の鏡にかけて、配當の少いものは値が安い、財産があつて整理の行届いた株は相當の値段を持つて居る、俺達が算盤を取つて見る前に整然と値ごろと云ふ數字に平均されて居る。尤も中には新東とか日本銀行株とか、特殊のものもないではないが、採算と利廻りと云ふ奴は、云はず語らずの間に頃合の數字を出して居るんだから面白いぢやないか」

「しかし中には一割にも一割二分にも廻るやうな株がありますな」

「それは危険だ まづ株を買はうと云ふ人は利廻りを根本にするとしても、そんなに高利廻りの株へ目を呉れると、何時の間にか元も子も無くなつてしまふ、それは下り坂を迄つて居る最中の株なんだから、そんなものに乗つるとひどい目に會ふ」

「すると何を標準にしたら宜いでせうか」

「それは先づ今の金利がどんな標準かと云ふことへ尺度を當てなければならぬ。郵便貯金が四分八厘、銀行預金が定期で四分五厘、公債が五分三厘見當、社債が六分前後、株はいろいろだが

郵船株でも八分、鐘紡のやうなものでも八分見當に廻つて居る、利廻りの計算法はいつかも君に話した通り、株の拂込へ配當を掛けて、時價で割れば良いのだから、兎に角みんなやつて見給へ、押しも押されもせぬ鐘紡や王子製紙などと云ふものゝ利廻りを標準にしてやれば間違ひはない」

「なるほど、つまり内容のしつかり株の標準利廻りを見て、それと同様な利廻りまで買はれて居る様なら無事だと云ふのですな」

「さうく、そこで入口はこちらを探し出すんだ」

金の七變化

「と云ひますと……」

「少し細いがね、入口は狭い方が宜いもんだ、中さへ廣ければ出入りが目につくから……」

と岡辰老人は前提して、

「銀行は四分五厘で預つて確實な擔保さへあれば六分見當なら貸す、何しろ一分五厘の利益があるんだから、どんく需要者があれば宜い仕事だ、話によればもつと安く貸す、六分と云へば二

錢一厘九毛の日歩だ、これなんかは頗る高い方だから、一錢六七厘とすれば五分八厘四毛の利息だ、これで借りるとするね」

「株を擔保ですか」

「さうく、八分の配當を貰ふ

株を擔保にし

て五分八厘四

毛の利息を拂

ふんだから、

差引二分一厘

六毛と云ふ

入口はこちらが出来て来る」

「なるほど……」

「しかし銀行では八掛とか九掛とか、金



わからんツね、
是れをよ。

額は貸さないから、この率を見なければならぬ」

「ふむ、ふむ、さうすな」

「いま茲に二千圓の資本で何か商賣をやらうと云ふものがあるとするね、その時はその現金二千圓を其儘に使はないで、八分の利廻りになる確實株を買つて、これを銀行へ擔保品とし、當座の貸越を約束する、當座貸越と云ふのは擔保品の價格だけは銀行で貸して呉れるから、現金の預金がなくても小切手でそれだけは支拂ひが出来るのだ、宜いかね、その代り日歩一錢六厘位は拂はねばならない、株券の會社から八分の配當を取つて五分八厘四毛の利子を拂ふのだから二分一厘六毛の利益がある。これは先刻話した通り、ところが商賣で日錢が入るとなれば毎日午後三時迄に賣上げた五十圓でも百圓でも直ぐに銀行へ預ける、さうすると貸越しを返済したことになるからその分だけは一錢六厘の利子を拂はないで宜いことになる」

「なるほど」

「そのうちに其株の値が上がるやうなことがあれば、それだけは當然なる入口はこちらである」

「なるほど」

「銀行へ現金が預けてあるとすると、氣に弛みが出るが借金だとすると、一時も早く返してしまひたくなるのは人情だ、自然と緊縮や節約が行はれて、其貸越しを埋めてしまふと、八分の利息と二千圓の株券は完全に入口はこちらになる」

「なるほど、微妙な作用ですな、して見ると我々月給取りなんかに応用するとすればどんなものでせう」

「それは近頃初まつた安田の日本晝夜銀行がやつて居る月給取りへの貸金が宜いちやないか」

「しかしあれは手続きが却々難しいぢやありませんか」

「なあに、上役の人が保証すれば直ぐでも貸して呉れる、だからまづ五百圓位の貯金を持つてる人が何か有利にやりたいと云ふなら、千圓だけの株券を買つて、それを上役に預けて保証して貰ふだね、銀行の利息は八分の天引と云ふのだから、約束が出来ると九百二十圓の金を貸して呉れる、それへ五百圓のうちから八十圓足して千圓だけ株代を拂ふ」

「なるほど、さうして支拂は……？」

「その翌月から十一ヶ月に渡つて月賦拂ひをして行くのだ、十一ヶ月と云ふと九十圓一寸になる

から、この場合はむしろ百圓づゝで十ヶ月にするんだね」

「しかし月給取りで百圓づゝは出来ない相談ですな」

「だつて君、資本として手元に五百圓、其内八十圓の金が出て居るから、四百二十圓あるだらう、だから、月々出して行くのは五十八圓で宜い譯だ」

「それも十ヶ月に渡ると苦痛ぢやないでせうか」

「それは樂ぢやない、しかし金を儲けるにはその位の辛抱をしなくつちや……、それに初める時機がよければ十ヶ月のうちに二度の賞與がある筈だ、それをうまく按配して行けば大して心配なことはないよ」

「なるほど、ボーナスがありますな」

「そればかりではない、八分の配當が二度来る、これが四十圓づゝ二度だから二ヶ月間は十八圓づゝ出せば宜い」

「なるほど入口はこちらですな」

「そこで利廻りだ、銀行の方では返済する毎に一錢四厘の日歩をつけて、最後に渡して呉れると

云ふのだから、最初の月に拂つた百圓には三百日間四圓二十錢、次の月が二百七十日間三圓七八錢、次が二百四十日で三圓三十六錢、次が二百十日で二圓九十四錢、次が百八十日で二圓五十二錢、次が百五十日で二圓十錢、次が百二十日で一圓六十八錢、次が九十日で一圓二十六錢、次が六十日で八十四錢、次が三十日で四十二錢と、合計二十三圓十錢の金が返つて来る」
「さうすると、八十圓の利子を拂つて二十三圓十錢の金が返るから五分六厘九毛の利子を拂ふと云ふ勘定になりますね」

「その通り、だから株の配當八分から差引で二分三厘一毛の利益しかないことになるが、千圓の株が千百圓に賣れると大へんな利廻りになる」

「その代り九百圓になると入口は彼方になりますな」

「そこだ、頭の働くところは……？」

岡辰老人は茲ぞとばかりの顔をして膝を乗り出した。

百發百中錄

小判の草鞋

米のなる木で作つた草鞋

雪に小判のあとがつく

「ねえ君、こんな唄があつたね、その草鞋で面白い話があるんだ」

茶を入れ替へて呉れた岡辰老人は、思ひ出したやうなことを云つて例の黒飴を一つ頬張つた。

「頃は享保何年と云ひたいが時代は何時か判らない」

と、改まつた調子で、ポツ／＼話し出した。

越後の國の海岸、半漁半農の小村に茂兵衛と云ふ男があつた。越後と云へば有名な雪國、冬の三月は寝て暮らすと云ふところ、茂兵衛はこの三月の冬籠りを利用して、セツセと草鞋を作り初

める。
 「茂兵衛どん、相變らず御精が出ることぢやの……」
 近所隣りの隙人は、軒づたひに遊びに来ては、手際よく作られて行く茂兵衛の草鞋に見とれるのだつた。

「なあに、大したこつちやないさ」
 茂兵衛は誰が訊ねて来ようが、一向頓着なしに草鞋を作る手をゆるめなかつた。

「しかし茂兵衛さん、お前さんは毎年冬になるとさうやつて草鞋を作つて居なさるが、町へ賣りに行く容子もなし、それを一體どうされるのだ」

それは近所中の疑問だつた。茂兵衛の草鞋作りは有名なものだが、それをどう捌くのか、どう利用するのか、知るものは一人も無い。それも其筈、茂兵衛が毎年作り溜める草鞋は、裏の納屋に堆高く積込まれてあるのだ。

「皆の衆、茂兵衛も漸く男になる時が来ましたが、春になつたらこの草鞋を船に一ぱい積込んで、佐渡ヶ島へ賣りに行くだ、これで茂兵衛にも一と財産出来ると云ふものさ」

茂兵衛はこんなことを云つた。

「へえ……？ 佐渡と云ふところ

ろは、そんなに草鞋の賣れる

ところかね」

みんなは今更のやうに驚

いた。すると茂兵衛はホツ

くと笑ひながら、

「なあに、行つて見なくつ

ちや判らないがね、何しろ

金掘り人足のふんだんに居

るところだ、持つて行けば

何とかなるよ」

と、的があるやうな、便りないやうなことを云つた。近所の人達は驚いた顔をして、



「だつてお前、金掘人足と云へば、日本國中の囚人ぢやないか、腰に鎖の繋つた囚人に草鞋を買ふ錢があるかね」

と、茂兵衛の顔を覗き込んだ。茂兵衛は相變らずケロリとした顔をして居る。

「なあに、その心配は要らねえよ。囚人を買ふ錢が無けりやあ、お奉行様を買つて貰はあな」

「お奉行様を買つて貰ふとしたところが、一杯の水さへお規則で當がはれる罪人だ、草鞋を買つて穿かす程のお情けがある道理はない」

一同は腹の中でこんなことを考へ合つて、もう一度クスリと笑つた。そして孰れも茂兵衛の無鐵砲を氣狂沙汰にしてしまった。

「まあ折角のことだ。やつて見るが宜い、この荒海を乗切つて、賣れるかどうか知れないものに、精根盡して病ひなさんなよ」

こんなことを云つて茂兵衛の計畫を慫んだ。けれども茂兵衛は眞剣だつた。春風雪を拂つて草萌ゆる陽春四月、五十石船に満載した茂兵衛の草鞋は佐渡ヶ島へ向て帆を上

げた。

寄進の決意

「お願ひの筋があつて越後から態々参りましたものにござります。一と通りお聞届け下さりませうなら、茂兵衛奴の幸せにござります」

佐渡の金山奉行、松平何の守とか云ふ嚴めしいお屋敷の玄關先に土下座した茂兵衛は、草鞋のお買ひ上げを只管糞つた。奉行は一伍一什を聞いて居たが、噴き出しさうな笑ひをこらへるやうに、

「茂兵衛とやら遠方大儀だつた。しかしそちも知つて居る通り、佐渡の金掘り人足は二度と娑婆の風を當てることが出来ない重罪人ばかりぢや、死ぬまで働くのが九牛一毛の罪障消滅、不惑や

情けで使つて居るのではない。岩角に足を磨り剝かうが、坑に落ちて死なうが、それは定まる刑罰ぢや、草鞋を穿かして働はるやうな掟はない。折角ぢやがこれは其方の見當はづれと云ふもの、

その儘持歸つて町方へでも賣られたらどうぢや……」

と、嚙んで含めるやうに云ひ聞かした。しかし茂兵衛は肯かなかつた。

「これはお奉行様のお言葉とも思ひませぬ。それは成る程、國の掟に背いた人達、例へどうなりませうとも自業自得でござりませう。しかし、天下の寶、融通自在の金を掘り出す役目は立派なもの、私達がかうやつて好きなもの、欲しいものを整へまするも、みんな金の力でござりまする。金さへあれば武士も町人も同じ生活が出来有難い世の中、其金を掘り出す役目は仇やおろそかに出来ませぬ。この儀お含み下し置かれまして、何卒其人足達に一足づつの草鞋をお恵み下し置かれまするやう、枉げてお願ひにござりまする」

「ほう、これは却々商ひ巧者な奴、其方の申することにも一理ある。しかしお上の掟に無いことはどうすることも出来ぬわい」

「それでは斯程お願ひ申上げましたも……」

「くどい様ぢやが、そりやならぬ……」

茂兵衛は落膽と云ふ字を顔一ばいにぶら下げた、が、やゝあつて大きな塊りをコックリと嚙み込んだやうに決心した。

「それではお奉行様、茂兵衛も男でござります。何年となく冬の三月を精根盡して作らへ上げたこの草鞋、誰一人に損害かける譯ではござりませぬ。この茂兵衛奴が残らず寄進致します。天下の通用金を掘り出す大切な役目に對して、一足づつ穿かしてやつて下さりませ。茂兵衛は商賣の爲めに理窟をつけて押賣りすると思はれることが残念でござります。綺麗さつぱりとお上へ寄進致しまする」

奉行も斯うまで熱心な茂兵衛の申出でを聞入れない譯には行かなかつた。

「それは奇特なことぢや、其方の厚意は人足達にもよく申し渡すであらう」
「快く承諾して呉れた奉行の前へ額をなすりつけた茂兵衛は、

「有難うござります。米のなる木で作つた草鞋、二度の勤めでお金を掘り出す、尊いことござります。茂兵衛はその草鞋を持ち歸つて、立派なお祭りを致します」

涙をふりこぼして喜んだ。

「感心な心掛けぢや、心なきものは雜糞として踏み捨てる其糞を天晴れ役に立てる心ばえ、奉行今更ながら褒め取らずぞ、しかし人足共の穿き古しを持ち歸つて壁のササにでもしようと思ふの

か……」
 下情に通じた何の守である。茂兵衛の腹の底を讀んだやうにニッコリした。
 「恐れ入ります。茂兵衛は物のみより、を考へて居ります。何分宜しなにお取計ひを願ひまする」

金掘大明神

何年と無く作り溜めた草鞋を満載して佐渡へ乗り込んだ茂兵衛は、一月足らずで自分の村へ歸つて來た。

「茂兵衛が歸つて來たぜ、一と財産出來ると云つて出掛けて行つたがうまく行つたかどうか」
 村の人達は興味を以て茂兵衛の船を待つた。

「やあ、不思議だぞ、草鞋が賣れ、ば空船で戻らなければならぬのに矢張り草鞋がうんと積んである」

船を見つけた一人がかう叫んだ。

「それ見た事か、あいつ氣が少し變だよ」

村の人達は茂兵衛の失敗は當然のやうに思つた。船が港へつくと茂兵衛は勢よく飛び降りた。

「さあ、村の衆、お祭りだ。金掘人足が穿いて呉れた草鞋だ、これを祀つて信心すれば金は自然に授かると云ふもの、みんな信仰さつしやれや」

村のものは益々茂兵衛を狂人扱ひにした。

「眉唾もんだ、うつかり口を利いて氣狂のかゝり合にはなるな」

こんなことを云ひ合つて誰も相手にしなかつた。けれども茂兵衛は一所懸命である。二日ばかりのうちに古草鞋の山を築いて「金掘大明神」と云ふ旗を押立て、赤飯を炊いて村中へ配つた。

「此處に金儲けのコツがあるんだ」

と、岡辰老人は冷たい茶を呑み干して軽い咳をした。

「金掘人足が草鞋の裏へ踏みつけた金を狙つたのが茂兵衛の眞意なんだ。この茂兵衛と云ふ奴は素晴らしい成金になつたさうだ」

「なるほど、うまく考へたもんですな、尤も今でも金銀細工の鋳屋は疊替へに金を儲けるさうですから、古壘が一枚十圓位に賣れるんださうですね」

「いや、大きな鋸屋になるともつとになる、何しろ五分の歩減りを勘定しても、月に一貫目の金をこなす細工場なら、五十目の金が疊の目に吸ひ込まれる譯だからな」

「大きなもんですな」

「まだそればかりではない、萬年筆の工場などでは、作業服を洗濯したことがないさうだ」

「へえ……？ どうするんです」

「洗濯屋が新しい作業服を持って来て只で置いて行くんだ」

「それは又どう云ふ譯なんです」

「古くなつた作業服にはイリジウムが附いて居る、其作業服を焼いて高價なイリジウムを取ると云ふ方法だ」

「なるほど、して見ると現在でも茂兵衛のやうな人は澤山あるんですね」

「そこだよ、君……」

岡辰老人の額は輝いて來た。

「百圓の月給取りが上役の保證で千圓の金を十ヶ月月賦で借りる。其千圓で八歩利廻りの株券を

買つて上役へ保證料として預ける。百圓の月賦は八十圓の配當と年二回のボーナスと五百圓の貯金を資本に濟し崩して埋めて行く。この結果が二分三厘の利息にしか當らないと君が不思議さうな顔をしたが、そこに妙味があると云ふのだ、何しろ數字と云ふ奴は正直なもんだが、時に依ると案外トポケものになるんだからね」

「へえ？ どうしてですか」

「だつてさうぢやないか、二と三と寄せれば五だが、これに乗けると六になるんだから……」

と、老人はニヤ／＼笑ひながら、

「それはなる程、今の勘定で行くと二分三厘にしかならない、黙つて貯金をすれば郵便貯金でも四分二厘になるものを、つまらんことだと思ふだらうが、上役に預けて置いた株券は、何時でも引出さうと思へば自由だ、これが銀行へ入れこしまふと、最後まで預けばなしになるかも知れないが、上役のポケットなら、うまい儲け話があれば一寸引出せる、草鞋の裏から金を取るやうなものだ」

「なるほど」

「つまり信用と保証の使ひ分けた」
「なるほど」

「そこで千圓の株券があつたらどうするかと云ふことになる」
「つまりさうですな」

「これからが問題さ」

と、岡辰老人は机の上から例の大福帳を取り上げて頁を繰り初めた。

相場三略秘卷

「先づ第一番に、如何にして小さな資本で大きな金儲けをするか、と云ふことを考へて見ようぢやないか、それは株を賣買することが一番捷徑だ、いまのところでは株以外にこれへ當嵌まるものはないね」

「しかし相場は危険ぢやないでせうか」

「危険なことをするから危険なんだ、例へて云へば東株を大正三年の八月初旬に買つて大正五年

の秋に賣り、大正六年の正月に又買つて大正九年の三月に賣り、大正十二年の九月の中旬に買つて大正十四年の四月に賣つたとすれば、素晴らしい成金になつて居る。けれども大抵の人は株の高い時に買ひたがる。安い時はいくら買へと勧めても買ふ氣にならない。金がだぶく剩つて居ながら折角のものを逃がしてしまふ。これは百人が百人の心理で高ければ、どこ迄も高くなるものと見當をつけてしまふ。安ければまるで只にでもなつてしまふんぢやないかと逃腰になる。そこで危険だと云ふんだ」

「そこが難しいところなんです。何所が買ひ場所か、賣場所かと云ふところを探るのが出来ない藝當なんです」

「馬鹿なことを……何でも無いことだ、その人氣の裏さへ行けば絶対に危険はない、まあ利廻りだとか歩合だとかケチ臭い話ばかりをして居た揚句だから無鐵砲のやうに思はれるか知れないがほんとうの金儲け術と云ふものは、利廻りや歩合算を超越しなければならぬと、云つて相場師になれとは云はない、結局は利廻りと云ふことになるんだが、採算を無視した賭博的な相場は大禁物だ、株式市場へ儲けようとして來る者は損をし生活費を働くつもりで株をやれば儲かる」

これは西洋の諺だが全く其通りだ」

「さうすると結局相場は如何なる時にやるべきや、と云ふことになりませうな」

「その通りだ、先づ十年に一度だな、人氣の作用ほど恐ろしいものはない、どんな事業でも、どんな商賣でも十年経つと必ず一轉機が来る。その時が相場の變動期だ、景氣循環の方則などと云へば可なり難しい議論になるが、恐慌期に買場所、熱狂時代に賣り場所と云ふ例がある通り、まあ今の所ではそろそろ買ふべき時機が近づいて来て居るのぢやないかな。金持ちが株の値下りで財産の減つて居る時だから、仕事に厭氣が出て居る。さうだらう君、百圓も百二十圓もして居た株が、今日では五十圓以下になつて居る、百圓の株を一萬株持つて居ると百萬圓の財産だが、五十圓になつてしまふと五十萬圓の資産になつてしまふ。そんな風だから、物ごとは何でも控へ目くくなる、事業は小さくなる。不景氣になる。株は段々下る。と云ふ順序だけれども、事業はさう簡単に潰れてはしまはない。有利と見れば別の資本家が現はれて其株を買ひ占め、大いに發展させると云ふことになる。其順へ附いて行けば成功疑ひなしだから恐慌期の買ひ時を狙ふ爲めに、平常金を貯へて充分に餘力を作つて置くのが肝腎なんだ」

「しかし相場には始終動揺する危険がありますな」

「それはある、だから資金一ぱいに乗り出して、其動揺に振り落されることが多い、これを失敗と云ふね」

「その動揺を順に行けば成功する筈ですな、それにはその動揺を知る何かの方法があると宜い譯ですが……」

「それはある、即ち三略虎の巻と云ふ奴だね」

と、老人は大福帳の中から箇條書のやうなところを探し出して、私の方へ向けた。

金的の狙ひ方

「先づ相場の變動を見るには、時の金融と相場との關係に細心の注意を要するね、一言にして云ふと金融が逼迫して来ると相場は安く、金融緩慢の時は高くなる、又株の収益力が多くなれば相場は高くなり、反対の場合は安くなる。貨幣が高ければ相場は安く、反対の場合は高い。これは當然のこととして一般原則だ、それから相場の勢ひだが、これは普通如何なる場合でも下落は暴

騰より迅速で、期間が短く値幅は大きい。これがまあ虎の巻第一條だね」

「なるほど」

「そこで第二には、上り相場とか下り相場とかの大勢は必ず続くものだから、其平均値段を取つて今はどつちに動いて居るかを見當つける。第三には、配當をする會社の株であまり變動の激しくない、又あまり動かない株を選んで利廻りを出し、金利と比較して高い時には賣り、買ふには安い時が一番よい。第四には變動の多い株だったら、上り相場の際は最近の天井から四五圓も下つた處から、買ひ下る場合は最近の底から一寸上つた處で賣つて出る。第五には最初の方針は中途で決して變更してはならない、利益を見る迄は押し通す……」

「一寸待つて下さい、押通すと云つた所で、中途で反對に行く場合は、見す見す損をするのに平気で居られないぢやありませんか」

「そこだ、何時かも話したやうに難平と云ふ奴をやる、賣買どつちでも、反對に行つた場合は玉を殖やして其差額を平均するんだ。だから相場の絶対原則としては、資金に比して多過ぎる玉を建てゝは不可ない、百株の處分が出来ると思つたら十株だけやつて居れば、萬一の時は十株全部

引取つて、徐ろに値上りを待つことも出来る」

「して見ると相場と云ふものは、餘ほど辛抱強いものでないと出来ませんな」

「それは君相場ばかりぢやないよ、何だつて忍耐と努力がなければ成功しないよ」

「それと研究ですな」

「さうく、殊に市場の動靜には常に注意し、賣買共に其機會を失つては駄目だ。靜かな弱い市場は絶好の賣場所だ、必ず下落相場になる、しかし既に半恐慌や恐慌になつたら買はなければならぬ、之と反對に靜かな強い市場は買場所だ、やがて熱狂して來た時は決然と賣りに廻らなければならぬ」

「しかし株式の銘柄も新聞などで見ると澤山ありますが、研究するのは數多くやらなければならぬでせうな」

「そりやさうと、此點に於ては故安田善次郎翁は妙を得た人だつたね、どんな株でも常に研究して居たものだ、生前俺が逢つた時、殆んど名も無いやうな株式會社の考課狀を一所懸命に調べて居た。何でその様な會社の内容を研究なさるんですと聞くと、これでも市場で賣買されることの

ある株だ、大暴落の時や大暴騰の時などは玉石混淆の御招件に預る資格がある、そんな場合に内容の宜いものだったら實質以上の値にならないでもない、そんな時の準備だ、と云ふのさ。なるほど一代にして名をなす人の注意は違つたものだ、と流石の俺も驚いたね」

「なるほど、事實はそれほどでもないのに大暴落の時などは、他の株と一緒に値が下がる、それを拾はうと云ふのですな」

「さうく、だからかう云ふ點に着眼して居れば、茂兵衛式金儲けがあると云ふものさ」

「それにはどんな株を狙つたら宜いでせうな」

「さあ、それは問題だ、一概にこれとは云はれんが、まあ其會社の収益を一株當りに割つて見て、其割合と當時の株の値段とを比較して、収入の多い割合に値段の安い株が將來騰貴する可能性があると見て、差支ないね、しかし呉々も注意するのは、株を買ふなら現状だけで判断しては駄目だ、將來を見る判断が絶対必要だ、現状でどんな成績を示して居ても、將來のない仕事に手を出すことは大禁物、かうなつて來ると經營者の人格手腕と云ふことになる」

「これがまた難しい問題ですな」

「だから相場は賭博ぢやない、立派な營業だと云ふのだ、その營業の懸引と云ふものが危険だとか冒險だとか云ふのさ、尤も操り手段と云つて相場を人間が作ることもあるからね」

「それへ引かゝつたら往生ですな」

「其代り附いて行つたら素晴らしい。例のロックフェーラーが三ヶ月間に二億弗も儲けた大仕掛な仕事をした時などは提灯をつけて無数の小成金が出來たものだ」

老人の話は段々と大きくなつて來る。

幸運の星

相場は不可い

「名刺の裏表が眞ッ黒になるほど種々な會社に關係して居る當代實業界の大惑星根津嘉一郎さんが、つくづく嘆息を洩らして、俺は相場なんかには手を出さずに、地道な事業にばかり熱中して居たら、もつと大きくなつて居たらう、と述懐するさうだ。福澤桃介さんなんかは相場はするもんぢやない、と青少年には戒めて居る。俺も其仲間だ、根津さんや福澤さんほどの富豪ぢやないが相場は禁物だと云ふことは感じて居る」

岡辰老人は膝の大福帳を靜かに閉ぢて、丸い眼鏡をはづしたことである。

「そのあなたが株の講釋をなさるのは少し矛盾ぢやありませんか」

私は逆襲した。老人は首を伸ばして顎のあたりを撫でながら、ホツ／＼と笑つた。

「尤もだ、しかし俺は株をやるのは賛成なんだよ」

「相場は不可い、株は宜い……？」

獨り言のやうに呟いて首を曲げると、老人は子供が持て餘して居る智慧の輪でも覗くやうに、「つまり根津さんでも、福澤さんでも言葉が足りないんだ、相場をしては不可いと云つて居ながら相場を薦めて居るやうなものだ、さうぢやないか君、どちらも電氣や鐵道や、麥酒や製粉の大事業家だ、あれだけの事業家だから結局大株主だ、何萬何十萬と云ふ株を山ほど持つて居る筈だらう、その株がどうして安くなるかと云ふことを考へると直ぐ判るぢやないか」

「と云ひますと……」

「五十圓拂込みの株だから、事業を初めるときは孰れも一株に對して五十圓の金を拂込んだに相違ない、それを三十圓でも賣る、二十八圓でも賣ると云ふのは、結局買ひ手を求めて居ると云ふことになるぢやないか、株を賣つたり買つたりすることが相場なら、これ即ち相場獎勵と云ふことになる」

「なるほどね、しかし買はなければ宜いぢやありませんか」

「さうは行かない、安いものなら買ひたくなるのが人情だ」

「しかし、株で成功した人と云ふのは少ないですからな」

「そこが相場と株の岐れ路だ。根津さんや福澤さん、浅野さんと云ふ大株主のお歴々、がこれと目當をつけて初めた事業でも、不景氣に押されては敵はない、利益が減つて來るところか、元まで喰ひ込むやうになつてしまつては、身も蓋も無いね、結局五十圓拂込んだ資本だが、誰か代つてやり手があれば、三十圓でも二十八圓でも宜いから譲ると云ふことになつて居るのと同じだ」

「さう云へばさうですな」

「そこで、其事業と將來の景氣とを考へて、あなたがたがやつて損をなさるのなら、一つ私の方で引受けて見ませうと云ふやうな豪い人間が現はれて來ると、其株を引取つて事業の肩替りが行はれると云ふ順序になる、つまり株を買はなければならぬいやないか、さうした立派な實業取引の間にはさまつて、右のものを左へ移す差額を狙ふブローカー式のやり方が、つまり相場と云ふのさ、だから事業を目的としない株の賣買は賛成出來ないと云ふことになる。即ち相場不賛成、株賛成の理窟が截然と判つて來るだらう」

「いや、よく判りました。しかし事業の目的で株を買ふと云ふのは餘ほど大きな思慮の下に行はれることで、十株や二十株を動かすものには及びもつかんことですな」

「はッはッはッは、相變らず君らしいね、十株だらうが二十株だらうが、事業をやる精神に變りはないさ、金儲けと云ふ奴は須く英斷だ、西洋の諺にも金儲けは大膽に恵まれると云ふことがある。それを穿違へて盲斷と無鐵砲をやらかすから、失敗するんだ、其失敗が手本となつて相場は危険だと早合點してしまふから不可い。目標を定めて大膽にぶつかつて行くのは獨り株ばかりぢやない、けれども無鐵砲と云ふ奴は目標なしに飛んで行くんだから、海へ落ちるか山へ突當るか知れたもんぢやない。まあいま迄の相場師にはそれが多かつたんだね、例の鈴久にしたところで、松辰にしたところで、あの通りだ、殊に無鐵砲の見本としては石井定七君なんかを數へなければならぬいね」

「石井と云ふと借金の上手な人だつたぢやありませんか」

「さうく、大阪地方裁判所の御厄介者になつてしまつたが、後で調上げた額は慥か八千萬圓も借金があつたさうだつたな」

「八千萬圓……？ 素晴らしいもんですな、どうしてそんなに借金が出来たんでせう」
「それが珍妙不可思議なんだ、何しろ無鐵砲の標本みたいなもんだから、することが飽く迄枯はづれさ、ところがこれへ引かゝつたのが日本信託銀行の四百萬を初めとして、住友、第一、臺灣、十五、鴻池、第三、藤田、野村、朝鮮、名古屋、明治、近江、加島、百三十、第百、藤本、山口、愛知、村井、古河、高知商業など、云ふ素晴らしい銀行がみんなやられたんだから、無鐵砲も時に取つては盲ら打ちと云ふ奴で飛んだことをするものさ」

「へえ……？ どんなことをやつたんです」

「それがね……」

老人は唾をコツクリ嘸み込んだ。

五圓で十圓

「君、壺算と云ふ話を知つて居るかね」

老人はニヤ／＼笑ひ出した。

「何です壺算と云ふのは……？」

「落語家がよくやる古い噺さ、二兩の壺を一兩で買ふ法と云ふ奴さ」

「はあ……？ 聞いたことがありませんな」

「それを當世向きの話にして、更に大きくしたのが石井式借金法と云ふ奴さ」

「當世向きと云ひますと……？」

「十圓の債券を五圓で買ふと云ふやり方さ」

「へえ……？ それは耳寄りな、一つ教へて貰ひたいですな」

ムキになつた私の顔へ笑ひかけた老人は、大袈裟に手を振りながら、

「君、そんなに眞面目になつちや駄目だ、これは落語なんだから、まあ茶話には面白いがね、結局出来ないことなんだよ、しかし石井はそれをやつたんだから無鐵砲だつたね」

「しかし、やれば出来ることなんでせう」

「相手が間抜けならね……」

「して見ると一流銀行がみんな間抜けだつたと云ふのですかね」

「えうね、えう云へばさうも云へるね、何しろ面白い話だよ」
 「いつ聞かして頂きたいのですな」

「まづ、五圓札を一枚持つて債券屋の店へ行つたんだ、そして十圓の債券で、割のよささうなのを見せて呉れと云ふので、いろく見せて貰つたとする」

「ふむく」

「そこで抽籤回数が多い、しかも一等五千圓と云ふ素晴らしい十圓債券を一枚探し出したもんさ、これくと云ふので代金を拂はうとすると懐ろには五圓札が一枚しかない、五圓で十圓の債券が買へる筈はないから、急に氣がついた風をして、おや、十圓札だと思つて一枚持つて来たがこれは五圓だ、序の時にあとの五圓を届けるから、この十圓の債券を一枚賣つて呉れと頼んだものさ」

「なるほど」

「すると債券屋なんて云ふものは、紙幣を賣るやうな商賣だ、貸賣りなんか出来ることぢやない、しかし折角来て呉れたお客様だから、そこは反らさない、それでは三千圓の割増金がついて年に三回も抽籤のある五圓復興債券で如何ですと云ふのさ、仕方がないから其五圓で、五圓の債券を

買つて歸つたが、途中まで來ると何と思つたか其男はまた債券屋へ引返して來たものさ」

「ふむく」

「いま五圓の債券を頂いて行きましたが、どうも十圓の方が割がよささうだ、取かへて下さいませんか、債券屋もいまの今來た客だから、よろしうございますと受合つたね、すると其男は懐ろから先刻の五圓債券を一枚出して、さつき五圓上げましたね、その五圓と茲に五圓債券が一枚、めて十圓、宜いでせう、それではこの十圓債券を頂いて行きます、と云ふ話さ、債券屋の番頭が間拔けたと、有難うございます、と云ふところさ」

「なるほど、最初に五圓拂つて、あとから五圓の債券一枚やる、めて十圓……なるほど」

「あつはツはツは、君も一流銀行の方だね……その手に聲色鳴物が入ると石井定七活躍の舞臺と云ふのになるのさ、何しろ石井と云ふ男は滋賀縣甲賀郡石部村に生れて、小學校を出るか出ないかで大阪の材木屋へ奉公にやられた、十八九の時だつたさうだ、主人に無斷で材木の買占めをやらかし、素晴しく儲けたので見込まれ、其處の養子となつて石井の姓を名乗つたんださうだが、雀百まで踊忘れすとやら、この買占めの味が附いて廻つて、たうとう大相場師になつたんださう

だ」

「へえ……？ 小僧の時分にね……」

「大正五年に、大阪堂島の米穀取引所で、米の思惑買を盛んにやつて、横堀將軍の名を取った石井定七の相場振りは、素晴らしいものだったよ、相場は俺の考へ一つで、上げることも下げることも出来るものだ、こんなことまで云つて居た位だから、すっかり調子づいてしまひ、大正十年の夏などは、天候が不良で、米作は一般に不作を豫想されたのをキツカケに、大がかりな買占めを企て、十數軒の仲買店を操縦して盛んに買ひ煽つた。米は忽ち脱線相場を現はし、たうとう正米より期米の方が二三圓も暴騰すると云ふ珍現象を呈した位だ、取引所もこれは大へんだと云ふので證據金の引上げを行つた。之れに依つて石井の證據金は百五十萬圓にも達したと云ふのだから素晴らしい買玉だったね、流石の石井もこの不意打ちには少し首を曲げざるを得ない、さあさうなると、いま迄ひどい目に逢はされて居た賣方共は、それ石井が行詰つたと云ふので盛んに賣玉を出す、これが爲めに一圓五十錢も暴落を演じると云ふ騒ぎ、石井は腹の中でクスリと笑つたが、これつばちの端た金で見くびられてたまるものかと云ふ顔をして、美ン事百五十萬圓の金を自動

車で運び込んだ。賣方は又べしやんこさ」

「聞いて居ても面白さうですな」

「全くだ、何しろ運もよかつたんだね、何でも四千萬圓ばかり儲けた時に、あと二三日で一億圓にして見せると云つて居た位だから、採算も何もあつたものぢやないさ、其證據には十六萬株しかない鐘紡の新株を廿一萬株も買つたんだから、無鐵砲此上なしぢやないか」

「へえ……？ そんな人物によく八千萬圓も貸したもんですな」

「そこがそれ、先刻の債券屋見たいな人が居るので出来た藝當さ」

新式借金術

飽くことを知らざる人には、幾何儲けたとて、これで宜いと云ふことはない、横堀將軍と異名を取つた石井定七は、東京、大阪、名古屋と三都の市場に買玉を這はして、相場の鍵を一人で握つたやうな顔をして居た。

しかし油断をすれば突刺されるのが相場の常道、買ひ玉に少しでも軟色が現はれれば崩される

虞れがある。そこは流石の彼れとても心得て居た。茲だと云ふところは、大袈裟な買玉を出して威嚇する。そして賣方に手も足も出させまいとする手段は忘れなかつた。

そんな譯で、彼れの相場資金も無限に必要を感じて来る。何がさて相場の神様として米でも株でも全國を震撼さして居る横堀將軍のことである。資金の調達に臨んでも内兜を見透かされるやうなことはしない。

米を買ひつけた受取證、その米を倉庫へ預けて置く倉荷證券、この不可分な二枚の證書を、二つに使ひ分けて金を借り出す位は朝飯前のことである。五圓が十圓に使へるのも、無限の買玉を支持する度胸が一つの信用となつてのことである。有力銀行が二つ返事で融通の道を拓いて呉れるのは、全く恵まれた彼れの天運であつた。

けれども、彼れはそれのみで飽き足りない、望蜀の厚望は遂に彼をして一種の魔術師たらしめたのである。その魔術の種に白羽の矢を立てられたのは誰あらう、お氣の毒にも可哀さうにも高知商業銀行と云ふ、田舎の手堅い小銀行であつた。

「君んところにも取引して置かうかな」

彼は葉卷の脂をベツと吐いて、高知商業銀行の應接室にのけ反つた。田舎銀行の分際で天下の大相場師、横堀將軍の預金を自分の口座に持つことは、聊か名譽であつた。頭取は番茶を下げさして珈琲に取かへた。

「いや、金はどうでもよい、手形を上げて置かう、それを定期預金にして置いて呉れ、かうして置けば君の銀行とも取引して居ることになる」

彼れは約束手形を一枚出して、金十萬圓也と書いたことである。頭取は顔を一べんツルリと撫で、

「あの、お用立てするのでございますか」

と、恐るゝ訊ねた。石井は傲然として笑つた。

「いや金を借りるんぢやない、預金だ、いま現金の持ち合せが無いから、手形を上げて置く、無論期日までの割引料は取つて置いて呉れ、そして十萬圓の定期預金證書を貰つて行けばよいのだ」

「はあ……？」

して見ると、十萬圓の約束手形を頂いて、十萬圓の定期預金證書を渡す、そして手形の割引料を頂戴する、と云ふのですな」

定期預金の利子よりは手形の割引料の方が高いに定まつて居る。結局預金者の損になる、その損を承知の上で取引すると云ふのは何が爲めだらう。頭取は首を曲げた。

「君、俺と取引するのは不承知かね」

彼は頭取の不審が解けないうちに浴せかけた。

「いや、決してそんな考へはございませぬ、早速手續を致しませう」

どう考へても相手の了簡は判らないが、兎に角割引料が只儲かることなので、銀行に取つては一文の損害もないのは明瞭である。彼は早速十萬圓の定期預金證書と、十萬圓の約束手形に割引料を添へたものと取かへた。

その後二三日して彼れの姿は大坂のある一流銀行の應接室に現はれた。

「これを擔保にして、五萬圓貸して貰ひたい、さうしてあと五萬圓は君のところへ預金をするから……」

と云ふ談判である。一流銀行は田舎銀行とは違ふ、本人を應接室であしらつて居る間、別の方に高知商業銀行へ電話をかけさせた。

「はあく、石井さんですか、石井さんなら私共の取引得意でございます、定期預金はございませぬ」

と云ふ返事である。其高知商業銀行の定期預金證書は直ちに一流銀行へ擔保となつて十萬圓の金が役に立つた。五萬圓は當座預金、五萬圓は現金と云ふので、石井の胴巻は蛇が蛙を呑んだも同様である。

「どうだい君、うまいものだらう、手形を田舎銀行へ入れて定期預金證書にする、其證書が一流銀行へ来て現金になると云ふのだ」

と、岡辰老人は目を剝いた。

「なるほどね、石井の名前を利用して、田舎銀行の信用を活用すると云ふやり口ですな」

「それがね、驚くぢやないか、大阪地方裁判所で調べ上げると、五十五通もあつた。その總額六千萬圓と云ふのだから宜い度胸だね」

「へえ……？ すっかり壺算ですな」

「だから日本の相場師は成功しないんだ、そこへ行くと米國の相場師なんて云ふものは秩序井然

たるもんだね、少くとも株をやるなら事業を中心に、飽迄徹底的なんだから……」
と、老人は話題をかへた。

相場の名人

「尤も米國だからと云つて、理想的な人ばかりぢやない、ひどいのも可なりある、だがこんなのはみんな短銃の御厄介になつてしまふ、何しろ投機の國、賭博の國と云はれる位だから、随分烈しい懸引は行はれて居るやうだね、たゞ其中で俺が感心したのはロズウエル・ビー・フラワーと云ふ男だ、元紐育州知事だつたのが感ずるところあつて相場師になつたんだが、そのやり方の精密なこと、云つたら、日本にあんな相場師はまづないと云つて宜いね」

「へえ……？ 例へばどんなやり方をするのです」

「いや、現今では日本の仲買店なども目覺めて来て、それに似寄つたことをして居るものもあるがね、何しろあまり當るんで、紐育の或る數學の大家は、幾多の表、及び統計書類等を作つて數年間に涉る株の變動を數學上から調査した結果、常に一貫して賣買兩方面に動いて居たフラワー

の遣り口が、數學者の調査したものに一致して居たと云ふことを發見した位だ」

「して見ると、フラワーと云ふ人は數學の大家だつたんですね」

「さあ、それは判らんが、兎に角其數學家の公言するところに依ると、數字の力に依つて、大相場懸引の成不成を容易に知ることが出来る、第一にフラワー氏の場面操縦方法は、如何にも學理的で、而も確然とした十露盤高いものだつた、と云つて居る位だから、調査方針が飽くまで科學的だつたんだね、何しろ一般世間の景氣不景氣、株式界の特殊狀況、取引所へ出入りする連中の心理的關係等まで巨細に研究した上で、總ての計畫を立て、居たんだ、これは獨り、相場ばかりでなく、何事業でも之れだけの用意周到さがなければ仕事は駄目だ、目先きや意地張りづくでやる仕事に満足な結果を見た試しはないからな」

老人の話は妙に地味になつて來た。

「そんな人だつたら、何か標語のやうなものがあつたでせうな」

話を實際へ引戻さうとする私は、老人の目を見つめて息を引いた。

「さあ、何かあつたらうけれども、只一つ彼れが死んでから發見された標語とも云ふべきものは、

「株の値を釣り上げたいと思はゞ、宜しく其株を買つてく買ひ捲くるべし」と云ふのがあつたさうだ、尤もこれは例の米國唯一の大相場師と云はれたキーンと云ふ人も云つて居た、「二萬株賣らうとして、市場に御誂ひ通り買ひ手のない時は、是非共附景氣で相場を作らなければならぬ、早く云へば十萬株買ひつけて、十二萬株賣るのだ」と云ふのさ、眞理だね、この十萬株の買附けに依つて、大分人氣が立つて来る、其隙を狙ひ、懸引で買ひつけた十萬株と、當の目的たる二萬株とを一緒にして賣つてしまふ、無論市場の形勢に依つて、必ずしも十萬株買ひつける必要はないかも知れない、又二十萬株動かしても肝腎の目的たる二萬株の賣場所が無いかも知れない、この邊の呼吸がフラワー式で、取引所へ出入りする人間の心理を巧みに應用したんだね、聯邦鋼鐵株、ブルツクリン速達電鐵株を初めとして、フラワー商會が株の大買附けをやつた當時などは、右を向いても左を向いても、話は「フラワーの買附一點張」と云ふので持切つて居た。それなのにフラワーの利喰とか賣退きとか云ふ言葉は何處へ行つても聞かれなかつた。そんな譯だから提灯をつける人間が續々出て来る。その間に當の御本尊は、ちやんと目的を達して居る」

「へえ……？　どんな風にやるんですか」

「極めて簡單さ、「秘密」の二字なんだから、ロスチャイルドも云つて居たね、商業上の懸引は秘密を以て第一とする、と、その秘密の話をする爲めに、とんだ前置が長くなつてしまつた。例のロツクフェラー三億圓大儲けの種明しにかゝらうかね」

と、老人は明るい顔をして見せた。

ロツクフェラー

「ロツクフェラーと云へば、世界の富豪として誰知らぬものもない有名な人だから、今更ら其經歷を話す必要もないが、商業學校を出て就職難に苦しんだところを見ると、最初から大富豪として生れて来た人でないことだけは事實だ」

「しかし石油へ着眼したのは流石ですな」

「それがね、其時分の米國は鹽と石油で大へんな騒ぎをして居た頃だから、今になつて考へて見ると、偶然かも知れないね」

「鹽と石油とどんな關係があつたんですか」

「その鹽がね、あちらでは山から掘り出すんだ、何しろ大陸だから、地面の中から種々な化け物が飛び出すのさ、そこで鹽の採掘事業と云ふものは大へんな勢ひで流行した。ところが地面の中に埋まつて居る代物だから、其山や畑を買ふのにも、みんな好い加減な見當で取引される、うまく掘り當てたものは成金、うまく行かなかつたら成貧と、恰度日本の炭鑛や金鑛みたいなものさ」

「なるほどね」

「そこで滑稽なのは、鹽を採るつもりで掘つて見ると、反對に水が出て来る、其水が石油だつたと云ふやうなことがある、石油が出るとなると今度は其方へ見當をつけて初める、石油を採らうとして掘つて行くと鹽が出たなどと云ふ偶然成金が可なり出たもんだ」

「へえ……面白いですな」

「こんな時代に刻苦精勵して居たロツクフェラーは、この石油にピタリと着眼したんだね、今日彼れある所以はこの事業に對する着眼さ、何しろ其時分は穀類の店をやつて居たのだが、石油へ目をつけると、其店を斷然廢めて乗り出したんだから……」

「餘程確信を持つたんですね」

「そりやさうだ、兎に角「燃料としての石油」と云ふ考へが將來を卜したんだね、これは有名な話だが、ある石油工場の競賣へ行つたロツクフェラーが、懐に二三千圓しかない金で、十四萬五千圓と云ふ値に競り落したと云ふのだから、餘ほど確信を持つて居たに相違ない」

「大膽ですな」

「そこだよ君、見込をつけたものに大膽なれと云ふのは……それを聞き込んだ友人のクラークと云ふ男は、おいジョン！ そんなに高い値で入れては、お前のものになつてしまふぞ、と目を丸くしたさうだが、その時彼れは、何なら今直ぐ小切手を書かうかと云つたさうだ、クラークはその熱心さを見て、君がそんなに確信のあるものなら、俺は喜んで君を信用する、君の好きな時に決濟するが宜い、と云はれたさうだ、これがロツクフェラーが石油王となる出發點さ」

「なるほどね、しかし石油と云つても地の中から湧いて来るものだから、投機の性質は免れませんな、して見ると矢張り幸運に恵まれた方の口ぢやありませんか」

「いや違ふ、それは成るほど、幸運は手傳つて居たか知れないさ、けれども彼れのは自

「と云ひますと……」

「兎に角、地の中から出る代物だけに不安定な事業であると云ふことを知つて、精製する方に重きを置いたんだ、それでも市價の暴騰や暴落があつて、尙ほ危険だと考へた彼は、君も知つて居る通り大トラストを目論んで、國中のあらゆる群小會社をみんな合併さしてしまつたんだ、それには君、容易な努力ぢやなかつたさ」

「それはさうでせうな、例のスタンダード・オイル・コンパニーと云ふのは二億弗からの大會社でしたね」

「さうく、ポンプで石油を送る輸送管を發明して、運賃を切下げ、相手の會社を競争させなかつたと云ふやうな、素晴らしく大掛りで出たんだからたまらないや、悉く合併されてしまつたさ」

「凄腕ですな」

「ところが、好事魔多しと云ふことがある、あまり大きくなり過ぎたんで、今度は政府が干渉し初めた」

「へえ……？ それは又、どうした譯で……」

「米國內第二位に位する鑛産物を占有しこれを私有財産に振替へるとは怪しからんと云ふので解散を命ずると云ふのさ」

「なあるほど、地面から出て来る石油を自分の財産にするんですからな」

「それへ黙々として對抗して行つたところが彼れの彼たるところさ」

『へえ……？ 屁古垂れないんですな』

「それどころか、反對に大きくなつちまつたんだ、そこに株の技巧と云ふのがあるんだ、現在四億六千萬圓かの大資本を擁して頭痛鉢巻で居る東京電燈會社なんかに教へてやりたい位だ」

岡辰老人は一服つけて朗らかに煙を吐き出した。

思はぬ成金

千九百十一年、五月十五日、米國の高等法院は、黒い法服を着た嚴正そのものである判事九名の手に依つて、資本金一億弗のスタンダード石油會社に最終の判決を下した。

「被告及び其組合機關は、違法にも、當共和國內に於て第二位に位する鑛産物を占有し剩さへ之

れを巨大なる私有財産に振替へんとす、共和國の公安保全の目的を以つて、當法廷は此危険なる共謀行爲を十一月十五日限り閉止すべき旨を命す」

と云ふのである。此判決が下ると同時に、米國は愚か世界の新聞は筆を揃へて、稀有の大事事件として取扱つた。新聞記者達はブロードウエー二十六番地にある、薄汚ないスタンダード石油會社に詰めかけた、そして其善後策は如何にすべきやと云ふ質問の矢を放つた。

すると何事にも祕密一點張りて押進んで來た當會社は、一言の發表もなく、只

「今となつては何ごとも云ふべきことは無い、此上は高等法院の判決通り、速かに實行の手續を取らう」と云ふだけであつた。

斯うした間にも風説は風説を生んで、いろ／＼な取沙汰が行はれた。

「何しろ二百以上の別箇の小會社が包まれて居るんだから事面倒だよ」

「しかし、トラストは三十四の會社が互ひに競争を避けた結果初めたことだから、三十四に別れるのは當然かも知れない」

「いや、五つ位に分割されるんぢやないかな」

尾に鱗つけて噂の種は擴がつて行くが、當の會社からは何一つ報告されない。其うちに三ヶ月ばかり経つてから、突如スタンダード會社から一つの發表があつた。

「高等法院の眞意は、三十四の會社に分割すべしと云ふ要求にあるらしいから、此方針に従ひ、舊ニュー・ジャーシー本社外三十三の別箇會社に分割する事に決した。就ては九月一日現在の株主は、ニュー・ジャーシー本社名義の舊株の外、十二月一日前後に外三十三會社分に割當てたる微分株を受取る筈である」

と云ふのだ、其結果、舊トラスト株一株は三十四分されて、以前は纏まつた一株であつたものが三十四分の一株と形を變へてしまつた。つまり株主は三十四の新會社に中途半端の株を持たされてしまつた譯である。

小株主に取り、これほど迷惑なものはない、元來スタンダード會社の親會社は誠に珍妙な資本を有つて居た。一口に一億弗と云ふが其實資本金は九千八百三十三萬八千三百弗である。だから百弗額面の株として九十八萬三千三百八十三株となる勘定たつた。

愈々其株券が株主へ發送される日の混雜は一ト通りのものでなかつた。何しろ株主の手許へ届

いた書留小包を開けて見ると、マッチのペーパーのやうな斷片株が一ぱい詰め込まれてあるのだから、驚いたに相違ない。

曰く、スロン、フィンチ會社發行株券一株の九十八萬三千三百八十三分の九百十三、即ち額面十仙也、曰くウオシントン石油會社發行株券一株の九十八萬三千三百八十三分の七千八百十三、即ち額面七仙也、曰くポーン・スクリムザア會社發行株券一株の九十八萬三千三百八十三分の九百九十五、即ち額面二十仙也、曰く加州スタンダード石油會社發行の分に對する九十八萬三千三百八十三分の二十四萬九千九百九十五即ち二十五弗四十二仙と云ふ風に、可なりやゝこしい株ばかりである。

昨日迄、市價七百弗と云ふ纏つた一株が、今日は三十五種の行列然たる紙片と變つてしまつた。さうなると株の仲買でも、一々簿記方に目を通さしてからでなければ、評價することの出来ないものとなつてしまつたので、結局七百弗紙幣の粉末を仕末するのと同様だから、仲買もうつかり手を出し兼ねる。

その内に例の三十四會社は順次配當期に達して來た。額面七仙の半端株そのものが珍妙不思議なのに、それに對する配當金と來ては尙更氣狂じみて居る。それでも矢張り正規の手續きを以つて履行されて行つた。

けれども小株主連は、二仙八厘二毛の配當だの三厘五毛の配當だのと云ふ馬鹿氣切つた煩に堪へぬので、小供の玩具にでもするより外はなかつたのである。

其内でこの微分株を根氣よく拾ひ集めた仲買は、素晴らしい儲けをした。と云ふのは翌年二月六日に及んでスタンダード會社は突然、資本金百萬弗より三千萬弗に増資すると云ふ發表をしたのである、しかも株主に對しては何等の負擔を與へぬと云ふのだから、二千九百萬弗の増資が獨りで出來てしまつたことになる。此時に目覺めた株の仲買共は血眼になつて微分株を探し廻つた。株は一度に何百弗と云ふ素晴らしい勢ひで暴騰した。何しろ一株の持主に對して二十九株の株が無償で割當てられると云ふのだから、相場は一躍七千弗と云ふ珍値を出してしまつた。

素晴らしい金儲け、こんな金儲けはまたとないことであると云ふので、仲買の人達はどんな破片でも探し出さねばならない意氣込で飛び廻つたが、其時はもうちやんとロツクフェラー一派の手に集められてしまつた後だつた。この株の値上りでロツクフェラーが儲けた金額は三億弗に上つ

たと云ふことである。

「巧妙な手段ぢやないか、政府も仲買も相場師も、すつかり鼻を明かされた形さ、その中で面白いのは、ある蒐集癖者が、面白がつて、マツチのペーパーでも集めるつもりで溜めて居たのが素晴らしい値が出て思はず成金になつたり、料理店のボーイがお客様から貰つて持つて居た一株の爲めに數千弗の金が飛込んだと云ふ話がある」

「愉快な話ですな」

「だから君、無鐵砲と大膽とは大へんな違ひだらう。ロツクフェラーの様に一つの目標に向つて驀進すると云ふことは何にでも必要なことさ、彼は後に青年に戒めて、仕事を變へるな、夫れが成功する迄一つの方針に執着せよ、勇氣を失ふな、そして貯蓄だ、節儉を實行しなければ諸君は決して金持にはなれない、諸君の出來得る何弗かを別にして置け、さうすれば結局に於ては、事業を初めるのに充分な資本となるであらうと云つて居る」

「なるほどね、宜い話ですな」

大儲けばなし

竹蜻蛉の元祖

「今日は一つ大儲けばなしを伺ひたいものですが……」

ついで他人の成功談を語つたことのない岡辰老人に、こんな質問を試みることは少し冒險だつた。と云ふのは、常に老人の口から他人の實を數へたところでは何になる。大倉喜八郎が鐵砲の買占めをやつて儲けたからと云つて、今時鐵砲を買占める譯には行くまい。それよりは今の時代に目をつけて、金儲けの穴を探るのが現代式なんだと云はれて居る。

だから、こんな話題を注文すれば、例に依つて鼻の先で笑ひ消されるのが落ちだ、と思つて恐る／＼訊ねると、岡辰老人はニヤ／＼した顔で

「さうだな、それも面白からう、成功した人の足痕を眺めて見ると、何か参考になることがある

ものだからな」

と、軽くうなづいて見せた。いつにない風向きである。こんな調子なら何か話して呉れるだろうと思はず膝を乗り出した私は、咽喉をコクリと鳴らした。

「三越の前重役倉知誠夫さんが、アメリカへ行つた時に、竹トンボを大道で賣つて儲けたさうだが、これなんかは思ひつきと云へば云へるが、日本ではもつとすつと昔にこれで儲けた人がある。倉地さんは其ことを知つてのことか知らずに思ひついたことか判らないが、兎に角、考へが一緒だつたとすれば、他人の成功談も聞いて置けば何時か役に立つことがあるだらうよ」

老人は恚う冒頭して眼をつぶつた。

「へえ……？ 倉地さんはそんなことまでなさつたのですか」

私は話題を引出すやうに呼吸を大きく吸ひ込んだ。

「これは聞いた話だから、嘘かほんとか判らないが、何でも上野の博覽會で大道賣子が紙製の蝶を飛ばして賣つて居るのを見て、これなら米國人が喜ぶだらうと考へついたので、早速製造元へ馳けつて、一個八厘で二萬個ばかり注文し、それを持つて桑港へ乗込んだんださうだ」

「へえ……？ 可なりな冒険ですな」

「それが君桑港で大歓迎だつたんだね、一つ三十錢から五十錢で二時間ばかりに三百個も賣れたと云ふのだから大儲けさ」

「うまくやりましたな、私は外人と共同で竹細工の製造をやつたと云ふ話だけは聞いて居ましたか……」

「それはそれから後のことだ、つまり竹トンボから聯想した竹細工さ、だから人間と云ふものは、どんな小さなものでも、これはと思ふものは熱心に研究することだ、それからそれへと大きな考へが浮んで来る……」

「全くですな、あの飛行機なんかも竹トンボが原因ださうぢやありませんか」

「それは外國のことだから、俺にはよく判らんが、その竹トンボを發明したのは、寛永年間、徳川家光公の時代だ、君も知つて居るだらう、先づ日本で成金の元祖とも云ふべき紀國屋文左衛門が初まりなんだ」

「あの蜜柑船の文左衛門、吉原で小判を撒き散らした紀文大盡ですか」

「うむ、あの紀文は二代目ださうだ、初代の文左衛門と云ふのはそれと違ふ、紀州熊野の土百姓、文三と云ふもの、悴で小さな時は文平と云つて居た、何でも七歳の時だつたさうだな、目から鼻へ抜けるやうな賢い子だが、手習や読み書が大嫌ひ、只々家が貧乏なのを何とかして金持ちにしたいと云ふことばかり考へて居たのださうだ」

「變つて居ますな、七つ位でね……」

「ある日文平は父の文三に向つて、お父さん、金儲けを考へたから、錢を五十文呉れないかと、藪から棒に云つた、文三は七つ位の小悴が云ふやうな言葉ぢやない、飴を買ふなら一文で澤山だと云つたら、兎に角五十文呉れと云ふので、試しに無けなしの五十文を預けてやつて見た」

「ふむく」

「すると、どこからか、竿竹を一本買つて来て、裏庭へ藪を敷き、その竹を長さ三寸位に切つては五分位の幅に削り、更に團子の串のやうなものを澤山にしらへて真ん中へ通し、兩方の手で二三遍回して空へ放つと、これが美事に飛び上る。名づけて「手遊び蜻蛉」と云つたさうだが、これを二三百こしらへて町々を賣つて歩いた。何しろ面白い玩具だと云ふので忽ち賣れてしまふ。

五十文の資本が一貫文にもなつて来るので、父の文三は大喜び、これは百姓なんかするよりは宜い商賣だ、一つ家中蜻蛉製造人にならうと云ふ騒ぎになつてしまつた」

「なるほど、うまい發明でしたな」

「年は七つだが、いまにこの子はどんな大金儲けをするか知れないと、兩親も喜んで文平の成長を待つて居ると、十四の春になつてこの文平がどつと重い床に就いてしまつた」

「やれく、兩親は心配したでせうな」

「心配どころか、これからが大へんなんだ」

釋尊のお告げ

「後世紀文大盡とまでなつたのですから、死にはしなかつたのですな」

「それは助かつた、けれども氣狂ひになつてしまつた。何しろ食事も執らずに寝て居て、瘦せかけた身體のまゝで氣が狂つたのだから大へんな騒ぎだ、昔のことだから加持だ祈禱だと、近所中のものでが寄つて集つて一所懸命病氣平癒のお祈りだ」

「ふむ〜」

「それが三月も續いたのだから兩親の心配は一通りでない、何か憑きものでもしたのぢやないかしらと、行者や修験者を頼んで來たりなんかするのだが、其時に限つて文平は床の上へ起直り「勿體ない下れ〜と」大人のやうな聲で行者や修験者を叱りつける。さうかうしてまた一月ばかり経つと、或る夜のこと文平は兩親を招ぎ、何時にない眞面目な顔をして、お父さんお母さん、永らく御心配をかけましたが、文平はすつかり癒くなりました。昨夜トロ〜と眠ると、いとも尊き佛様が現はれて、我は山城國清涼寺の本尊、三國傳來の釋迦牟尼佛である、汝が此度の疾病は最も危篤き症にして、一朝一夕に治し難しと雖も、日頃兩親の貧しきを嘆き、何とかして安樂にさせんと八方苦心する汝の孝心に愛で、三日の内に佛力を以て治し遣はすべく、全快の後是我佛地に來り、一七日の參籠あるべし、ゆめ〜忘ること勿れと仰せられたかと思ふと全身汗ぐつしより、目がさめて見ると、何となく氣が清々しくなりました。と物語つた。いつにない物の云ひ方なので兩親は、これなら全快も間近だらうと大欣びだつた。すると其翌る日から、三度の食事事も常に變ることもなく、二日三日と日を趁ふに従つてめき〜とよくなつた」

「へえ……？ 奇蹟ですな」

「昔は斯うした靈驗記がよくあつたものだ、兎に角嵯峨の清涼寺、釋尊の御告げで快癒したのだから、文平は兩親に頼んで七日の暇を貰ひ、遙々と山城國へ出立した。清涼寺の方ではそんなことを夢にも知る筈はない、しかし本尊の御利益で病氣全快をしたものが、參籠に來たと云ふのだから悪い氣持ちや無い、快よく文平の願ひを入れて客分のやうな扱ひで待遇し、朝晩の勤めの外は京都見物に連れて歩くと云ふ歡待ぶりだ、文平も宜い氣になつてたうとう三七日も參籠を續けてしまつた。

「なるほど、名所古蹟の見物ですな」

「それもあるが、寺の方の待遇がよかつたからだね、さてさう〜何日まで居られるものでなし、愈々お暇と云ふ時になつて文平は、清涼寺の老僧に向ひ、これほど靈驗灼然な本尊を自分の土地の人にも信仰させたい、せめて一週間なりと出張帳は願はれまいかと折入つて頼み込んだ」

「ふむ〜、ありさうなことですな」

「すると老僧もさう云ふ結構なことなら自分一存でも許したいが兎に角本山の許可を得てからと

云ふ約束をして文平は熊野へ歸つた。歸ると早速其足で家へは歸らずに大黒屋庄左衛門と云ふ素封家の家を訪れた。そして自分は清涼寺の釋迦牟尼佛に救はれたものだが、此度參籠の序に、この灼然な本尊を土地の人達にも禮拜させ度い、出開帳を願ひして來たから、費用萬端の御心配に預りたいと申出た」

「は、あ、なか／＼抜け目のない少年でしたな」

「ところが此素封家は信仰が大嫌ひと云ふんだ」

「一寸困りましたな」

「それが彼の豪いところさ、元より大黒屋に信心氣のないことは承知の上なんだから、説得に利を以つて釣らうと企らんだんだね、即ち斯うした寒村僻地では、如何やうに働いたところで、部落の人達が金持ちにならうとは思へない、それには近郷近在の金を集めて村民に霑はしたいと思ふ、御損はかけないから一村の爲めと思つてお力添へを願ひたい……とな」

「なあるほど、つまり觀光團誘致策ですな」

「さう／＼、土地の物産で一村を富ますと云ふことは出來ない。と云ふ議論なんだ、大黒屋も小

膝を打つて喜んだ、早速承知をして出開帳一切の費用を持つことになつた」

「うまくやりましたな」

「さあ愈々其ことが發表されると近在は申すに及ばず、五里も七里も遠方からまで善男善女が參詣に來る。開帳に借りた寺は、境内一面に見世物小屋、力持ち飲食店、大へんな騒ぎ、さうして此村へ落ちた金が二萬五千兩と云ふのだから素晴らしいぢやないか」

「その頃の金でね……」

「文平と大黒屋は大當りさ、何でも此の時に分配に預かつた文平の収入は壹萬兩を越えたさうだから……」

「して見ると病氣は嘘だつたんですか」

「さあ、それはよく判らない、豈夫滿更嘘ばかりは無かつたらうが、斯う云ふ計畫的に運んで行くところは、まあ金儲けの天才だつたんだね」

老人はかう云つて一服すひつけた。

流れる現金

「今度は外國の話だが面白い話がある。君はエドワード・ボックといふ名前を聞いたことがあるかな。この一月に亡くなつたが、アメリカのレデース・ホーム・ジャーナルと云ふ二百七十萬部も發行する婦人雜誌社の副社長、エドワード・ボックと云ふ人をさ」

「あの人は慥か廿五六で婦人雜誌の編輯長になつた人でしたね」

「さうだ、生れは英國の愛蘭だが、貧乏な家に生れた少年さ、これも紀文のやうに、何とかして兩親に樂をさしたいと常に考へて居たが、之と云ふ資本がある譯ぢやなし、うまい考へも出ない。そのうちにフト思ひついたのが淺野總一郎さんのやうな水賣りさ」

「なるほどね」

「夏の暑い盛りに一ぱい幾らと賣るのだが、大當りさ、ところが宜いとなると眞似人が簇々出来るものだ、あつちからも此方からもバケツを下げた少年が現はれて、競争して來る、そこでボックは考へた、これは只の水では不可ない、砂糖を入れてやらう、と云ふので、砂糖水にした。す

ると又みんなこれを眞似る。ボックは又考へた。今度はレモンを入れてやらうと云ふので、レモン水だ」

「へえ……考へるもんですね」

「また競争者が殖える、そこでもう此上は仕方がないと云ふので、彼は又別の事を考へることにした。と云ふのは活動寫眞のプロگرامさ」

「活動のプロをどうするんです」

「あれは裏が眞白だ、勿體ないことだと思つてこれへ廣告を取つて見ようと考へたんだね」

「なッ、なあるほど」

「考へてしまへば何でもない事のやうだが、それへ目をつけたところが豪いぢやないか、それが機縁となつてレデース・ホーム・ジャーナル社のカーチス社長に發見され、廿五の青年で同社の編輯長さ」

「豪いものですな……」

「ところが就任の挨拶が振つて居る、多くの編輯局員と社長を前に置いて、私は婦人と云ふもの

は今年七十になる母より知らない、しかして婦人雑誌の編輯長たることは甚だ大膽のやうであります。私の信念に於ては大なる成功を収めることが出来ると思ひます。先づ此婦人家庭雑誌を偉大ならしめるものは、賢明なる編輯局員でもなく、社長カーチス氏でも無い、それは讀者であると云ふことを念頭に置かなければなりません、と云つた。すると多くの人の中でパチ／＼と手を拍つたものがある、それは誰でも無い社長カーチスだつた。斯うした一つの目標に決心の臍を堅めると云ふことは、何事業にも適切なもんだね」

「宜い話ですな」

「王子製紙の藤原銀次郎さんなんかもこのコツを掴むのに妙を得た人だね、最初は商人を志したんださうだが、田舎新聞の記者になり、三井の中上川彦次郎さんに見出されて、初めて三井の社員になつたんださうだところが商機を見るに鋭敏で、三井には無くてならぬ人になつてしまつた。人間と云ふものは重寶な人にはなりやすいが、無くてならぬ人には却々なれないものだ」

「全くですな」

「今でこそ王子製紙と云へば、押しも押されもせぬ立派な會社だが、元は三井のお荷物會社だつ

たんだ。と云つて三井ともあらうものが、いくら缺損ばかり續くからと云つて、折角の會社を潰してしまふ譯には行かない。誰かに整理させてバランスの取れるものにしたいと考へた結果、白羽の矢を立てたのが藤原銀次郎さんさ。藤原さんも招ばれてこれ／＼だと云ひ渡されたやうなもの、直ぐにお引受けしませうとも云ひかねる、兎に角工場を一つ拜見してからと云ふことになつた」

「なるほど尤もな話ですな」

「そこで工場へ行つて見たやうなもの、元々職工ぢやなし建築の大きなのや精巧な機械などを見せられたつて分るものぢやない。一々感心して見て廻つて居たが、紙漉工場の裏を流れる川を見て、ハタと手を拍つて獨りうなづき、其儘會社へ引上げて、承知いたしました、早速お引受け致しませう。と快諾した」

「は、あ、水利の便へ着眼したんですな」

「さうぢやない、其時のことを今でも藤原さんは話されるが、自分は紙を作る経験は乏しかつたが、裏の川を流れる水が濁つて居る、濁つて居るのは、原料が流れて居るのだ、其原料を無駄に

流さず使つてしまふやうにすれば、この會社の整理は立派につくと考へたんださうだ。さうだらう、水が濁るほど原料を流してしまふことは、現金を流すも同様だ、そこへ目をつけたところが藤原さんの藤原さんたるどころさ」

「つまり經營の合理化ですな」

フォードの目算

「さうく、近頃は合理化々々と云ふ言葉をよく聞くが、これは却々出来んものだよ、我々だつて見給へな、鮭や干物で茶漬ばかりを食べて居れば、幾らづつでも貯金が出来るとは承知して居るが、さてどうやら暮して居るとそれが出来ない、切迫つまつて食へなくなつてしまへば、鮭どころか味噌で飯を食つてもうまいものだ。人間と云ふ奴は根が横着に出来てるもので目先のことしか考へない。例へて云へば、提灯を借りた禮は云ふが、提灯なしでも濟むやうに照らして呉れる太陽へは誰も禮を云ふ奴がないからな……」

「その通りです。全く目先さばかりで生きて居るやうなものですな」

「だからさ、そこをもう一度考へることが金儲けなんだよ」

「だが、そのもう一度考へるが凡人には出来ないのですな」

「なんの君、それは熱心が足りないからさ、何でも熱心に工夫さへすれば出来ることだよ、それが即ち合理化さ、例のコンビーフ王と云はれるルウキズ・フランクリン・スウキフトと云ふのを知つて居るかね」

「あのマサチュウセツ州ケープ・コッドのウエスト・サンドウキチ農場で稼ぎの中から十八弗の貯金をして、牝の小牛を一疋買ったと云ふ儉約青年のことですか」

「さうく、活動的な牛肉屋で有名な男さ」

「牛肉屋ばかりではなく、地方の農家と屠殺業者の間に立つて、家畜類の賣買もやつて居たのではなかつたですか」

「さうだ、其頃はどこの地方でも牧畜が盛んで、ボストンの郊外から、ブライトンや、ウオータータウンにまで延びて行つたほどだつた。この中にあつてスウキフトは考へたんだね、何しろ此勢ひで此事業が續けられて行けば、何處まで擴がるか判らない、今のうちにシカゴへ屠殺場を設

けようと、着眼した」

「なるほど……？」

「元來シカゴは家畜市場の中心地だったが、牛肉の需要は東部地方が多い、それなのに需要の少ないシカゴに屠殺場を設けることは大なる冒険である時まで云はれた。それにも拘らず、スウキフトは斷然始めたんだ」

「どうして調理牛肉の需要者の澤山ある東部へ設けなかつたのですか」

「そこが、もう一度考へるなんだ、果せるかなスウキフトの牛肉は東部地方で羽が生えて賣れる、と云ふのは安いからだ、安くして宜い品を賣つて賣れないと云ふことは無い、何處へ行つてもスウキフト商會の肉と云へば奪ひ合ひの有様さ」

「どうして安く賣れるんです」

「君に考へつかんかね、即ちシカゴから東部へ調理肉で送れば、要らない骨や皮の運賃を仕拂はなくて済む、其運賃だけ安くすれば、生きてる牛のまゝで送る人達の肉よりは格段な相違ぢやないか」

「なあるほど、もう一度考へるですね」

「世界一の大金持、フォードだつてさうだよ、景氣がよくなつて物價が高くなれば、職工の賃銀を上げてやらなければならぬ、もし黙つて自分だけ儲けて居れば、必ず職工から増給の要求が来る、それを待つて争議だの罷業だのと云ふ面倒なことに時間を費すよりは、一ぺんに職工の賃銀を上げてやれ、しかし只賃銀を上げてやることは出来ない、それには其賃銀だけの仕事をさせる工夫を考へてやらなければならぬ。二圓づゝ二日働いて四圓取られる賃銀なら、一日に二分の能率を上げさせて一ぺんに四圓拂つてやればお互ひに儲かる。と云ふので工場の設備をかへて、どうしてもそれだけの仕事をしなければならぬやうにしてしまつた。だからフォードは職工の賃銀を最高に仕拂つて居ると云つたつて、勘定して見ると結局安い賃銀を拂つて居ることになつて居るんだよ」

「なるほどね」

「道を直さずに、馬車馬の尻ばかり叩いて居る馱者は痼癩を起すだけ損をして居る。それより道を平らに直してやれば、投つて置いて馬は愉快に馳けるからな」

「なるほど、もう一度考へるですな」

紙幣の買占

岡辰老人は鼻の下を二三度引こすつて、

「その通り、しかし何と云つても信念だね、先達外國から取寄せた立志成功談を数種讀んで見たが、其人に依つて二つの型がある。第一はどんな仕事でもそれへ携つたら飽く迄やり通すことだ、と云ふのと、もし失敗だと思つたら直ちに方向を轉換せよと云ふのだ。つまり、成功するまでは何度でも努力しろ式と、成功の見込なきものは早く棄てる式だ。これはどつちが宜いものだから、人々に依つて種々な徑路を辿つて成功して居るのだから、判断に苦しむが、只其出發點に於ける信念だけは一致して居るやうだ。と云ふのは如何なる仕事でも全力的でなければならぬと云ふ所だ。こんな些細なことはどうでも宜いと云ふやうでは、何をやつても成功は覺束ない。兎に角全力的でなければ不可い」

「それはさうですな、しかし其全力的なるものは其人のもつ力と重大な關係があるのぢやないですか、つまりお相撲の全力と子供の全力では力石と小砂利ほどの差があるやうに……」

「だが君、信念には大小なしだよ、一代に數千萬圓の財を積んだ故若尾逸平翁など身體は小さい方だし、顔は柔和な、男としては醜男の方だが、素晴らしい大仕事をやつてのけたんだからな」

「さう／＼非常に長命な方で八十五か六の時に、醫者も見放した病氣で居ながら、醫者は病氣を搜がすのが役目だ、病氣は病人が直すんだ、と云つて、ケロリ直つてしまつたと云ふ話がありますな」

「そんな話もあつたね、兎に角時間を尊重する人だつたらしいね、人が翁を訪問しても用談が濟むとクルリと傍を向いて手習ひを初めると云ふ具合だつたさうだ」

「なるほど、空談に時を費さないと云ふのですな」

「翁は極めて樂天家で、何ごとにも隨喜感激一點張りを主義として居たらしいね、明治大帝は御盛運のお方だ、維新の改革が出来たのも御盛運の結果だ、現代の日本が世界の強國になつたのも御盛運のおかげだ、斯様な御盛運な主上の御治世なら日本は隆々たる大國となるに相違ない、我は何と云ふ宜い月日の下に生れて來たことか、感謝しなければならぬ」と常に云つて居た。

つまり翁は現代の讚美者だった人だね、その信念から生れるところの判断は、悉く「積極」と云ふ二字に盡きて居た。故に翁が數千萬圓の財を成した出發點は、この信念が基礎だったんだ」

「は、あ、大東京の交通機關へ着眼して馬車鐵道の株を買ひ込んだり、正金銀行の株へ着眼したりしたのも、其結果ですな」

「それはすつと後のことだが、翁の振り出しは何と云つても太政官札の買占めさ」

「太政官札と云ひますと……」

「明治初年に政府が発行した紙幣さ、其頃はまだ政府に信用のない時分なので、いかに焦つても不換紙幣のことだから、一向に値が出ない。それを翁は片つばしから買ひ漁つた。錢に換へることの出来ない太政官札を、好んで錢と換へて居る逸平は大馬鹿者だなど、人から笑はれたものだが、そんなことには一向頓着なしだ、維新の政府は決して薄弱なものでない、今上天皇の御治世はきつと御繁昌であるべき筈だ、さうすれば明治政府の發行する紙幣が何時までも安い譯はないと云つて、殆んど全財産を擧げて太政官札を買つた。それが恰も無鐵砲とも云ふべきほどの勢ひだったので、近親のものも心配して萬一のことでもあつたら困るから、少しは家族のものに何と

かして置いてやれと忠告するほどだった。すると翁は言下に、馬鹿なことを云へ……！ 此札が紙屑になるやうだったら、日本が没落だ、没落した日本に生きて居られるか、と云つて一向に取り合はなかつた」

「ふむ……理窟ですな」

「つまり翁の信念は國家本位さ、國家と運命を共にすると云ふところに大なる決心があつたんだ。それが目算通りに當つて、札の價が上つて來た。若尾逸平が日本分限帳へ載るやうになつた財産の作り初めはこれさ」

「なるほどね、正しき信念は正しき富を與へる、ですかな」

「全くその通りだ、金儲けは人の氣がつかぬ穴を、悪くすく奪ひ取るものだとばかり考へて居る現代人には金儲けは出来ない。まあとつくりと考へることだね」

金的發矢録

電氣の發明

暖かい冬の日は、張換へた障子にほんのりと黄色く遊んで居た。

老人は腰のまはりの煙管を拾ひ上げて、一服大きく吸ひ込みながら、

「金儲だつて人の話ばかりぢやア面白くない、誰れでも出来る事が、ゴロ／＼轉がつて居る。其方を研究する事が目下の急務ぢやアないか」と笑ひかけた。

私は斯う来るだらうと思つて居すまひを直しながら、膝を乗り出してた。

「實は其れを伺ひたいのが眼目なのです、と言つてもこんな行詰つた世の中に、そんな無雑作に金儲の途があると云ふ事は、一般の人から見ると眉唾ものゝやうに見えて本氣になれませんナ」其れは老人の話を昂奮さしたい爲めの計略であつた。案の定老人は煙管をボンと叩いた儘、放

り出して丸い目をした。

「君迄そんなことぢやア仕様がないネ。先達も鐘紡を退いた武藤山治氏が或新聞記者から、何か金儲がないかと聞かれた時に、無雑作にあると云つたから、其新聞記者が鼻の先で笑ひかける様に、どんな事ですと聞いたものだ、すると武藤さんは、極めて簡単に、そりやア君發明だよ、と云つた。人の不自由なものを、便利にする様な發明さへ起れば、いくらでも金は儲かる、高い値段でなければ買へないものを、安くこさへて賣る様にすれば、いやが應でも儲かるに極まつて居ると答へた。俺れも其れと同じ意見だよ」

と、やうやくムキになつた。

「でも、そんなに發明が簡単に出来るもんぢやアありますまいが……」

私は飽く迄も老人の話をハツませる様に促して行つた。

「そこだよ君、日本人は元來人が遣つて見て成績が好ければ、夢中になつて跡を追ひかけて行く癖がある爲に、何事も失敗なものだ。それに發明など云ふものは、特殊の技術家がやるもので、一般の人には行へない様に考へて居るが、其れが機械とか化學とか云ふ様なものから割り出

される發明は別として、一寸した考へから今迄と變つた様な工夫が考へつかん事はない筈だ。そこに發明の神祕と云ふものがある。例へば龜の子タワンにしても、物干ばさみにしても、別に素晴らしい化學の力や難かしい力學の作用と云ふ様な、學問の窮理から出來上つたものでもないと同じ様に考へて見たら、まだくザラにある筈だ」

「例へば今誰れにも出來る發明としたら、どんなものでしょう」

「そりやア君、いくらでもあるサ、大きな問題では電氣、現在の電氣は、水力と火力の二つによつてなされて居るが、燈火用の電氣としてはあの熱は全然必要がないものだ。俺は詳しいことは知らぬが、學者の話に依ると、現在の燈火用電力は熱力の二十分の一もあれば、いと云ふ話である。して見ると現在の日本で作られて居る、電力は水力が二百五十萬キロ、火力が百五十萬キロあるとして、若し二十分の一で済むとすれば、二十萬キロあれば、宜しい事になる。大變な國益ぢやアないか。其れにもう一つは火力の爲めに費される石炭、これなど節約する爲に、目下研究されつゝある海潮の満干に依る力から電力を取ると云ふ様な事が發明されたら、素晴らしいものになる。殊に最近では海底の冷氣と海面の熱との差に依つて電氣を起さうとする様な、研究さへ行

はれて居る處を見れば、聽ては素晴らしい大金持が生れるに極つて居る。是れなどは殘された金儲の材料として、有力なものと云へるだらう……」

「成程、現在の燈火用電氣から熱を除き去ることですな、然しさう云ふ専門的な發明になると、差詰めエヂソンでも頼まなければならぬのですが……」

「それだから、料簡が違ふ、何も電氣だからと云つて、エヂソンに限るといふ話はない。誰れが手をつけてもいゝ事なんだ」

「然し、日本に其れ程の熱心な研究者があるでしようか」

鯛に鯛の味

岡辰老人は急に頭を振つて、

「無いネ、其れは有るには有るだらうが、何しろ、日本の發明界は、金持が少しも發明家を引立つてやらない。發明品をこしらへて見て具合が良い様ならば、其れを買ひ取つてしまひ、自分だけ儲けようと云ふ様な、盜棒根性ばかりで、發明家を養成しようと云ふ様な事が、少しもない爲

めに、大發明家は出て来ない。稀に出て来たとしても、一代限りのもので、其發明を受継いで遣つて行かうと云ふ様な者はない。例の鳥潟博士のやうに、彼んな素晴らしい發明をしながら、途中で死んで終へば其れ迄だ、斯んな事で大發明家が出よう道理はない、ト云つて發明家が出て来ればいゝと云ふ事だけは承知して居ると見えて、國庫の負擔で理化學研究所の様なものもこしらへたが、是れも開學問だと思えて、折角こしらへた豫算を緊縮だ、節約だと云つては減じてしまふ。だから酒の代用として理研酒と云ふ様なものが生れても、米でこしらへた酒と値段が同じ様なことで、發明も何もあつたものぢやアない。同じ様なものが一つ餘計出来たと云ふだけで、發明の價値は何もない」

「慘々ですナ」

「事實其通りだよ、元來日本の資本主義と云ふものは、矛盾した發達のしやうで、攻めるにも攻められないサ、金持ちと云へば、三井とか三菱限り、此金持がつぶれさうな事業を見て居ては、手も足も出なくなつた處で、鶉呑みに取つて終ふ、さうして無限に膨れて行くのだから、此調子で行くなら、政府と三井、三菱の勢力だけは押しても、突いても倒れる事はあるまい。其かはり

傍は大迷惑だ」

「少し左傾しましたナ」

「ハ、ハ、ハ、」

と笑つて、

「ト云ふ譯でもないが、勢其んな愚痴も云ひたくなるぢやアないか、日本人が金儲に疎い所以は此處にあるんだ。世界の大金持と云へばフォードとか、ロックフェラーとか云ふ人達だが、此人達の經歷を見ると、いつかも話した様に、合理的に金が出来て来て居る。然るに日本の金持は何かしら政府と結託しなければ金儲けが出来ないものゝ様に考へる爲めに、いつの間にか下萬民に至る迄、さう云ふ根性が浸み渡つて、誤魔化す事が金儲の秘訣でもあるかの様に考へてしまつて、順序を立てた金儲なんかには目もくれない」

「然し近頃は科學的に大分目醒めて来た様ぢやアありませんか」

「其れだ、俺れが金儲を力説する所以は、其なんだ。先にも發明の事を話したが、發明が出来ない人間なら發見でいゝぢやアないか、何れにしても、人の先に立つて一つ國家的な、社會的な仕

事と云ふ事にポイントを置く様な料簡にならなければ、ほんとうの金儲は出来るものぢやアない」

「其處で手輕な處にどんな事がありませうか」

「サア、先づ食物だネ、食糧品の天下と云ふものは、考へると僅かの間に素晴らしい變り方をして居る。是れなんかは着眼すべき處と思ふネ、例へば味の素を見給へ、あれなどは、池田博士が偶然にこしらへたものだけに、今日では鈴木商店が一千万圓もの財産を作つた材料になつて居るぢやアないか。そこで俺は考へたんだ、先づ食物の方から行くと、鯛に鯛の味を持たしたらどうだ、馬肉に牛肉の味をもたしたら何となるか、是れなどは喉三寸の味覺の變化で、一疋五厘と一疋五圓の差がある、斯う云ふ調理の方から考へて行つたら、麥に白米の味を附ける事も出来るだらうし、豆腐穀に鶏卵の味を持たす事も不可能ではなからう、こんな處に面白い發明の材料が轉がつて居るぢやアないか」

「成程ネ、粘土が砂糖にでもなる様だつたら大變な事になりますネ」

「冗談ぢアないよ。南洋では、粘土を立派に食糧品として賣り出して居る處がある。元來土と云ふものは、宇宙に存在する凡ゆる物の變化物であつて、形あるもの滅したる時、必ず土となつ

てしまふ運命を持つ、して見ると土を精微に分解研究して行つたらば、立派な藥品が生れるだらう、立派な食糧品が生れるだらう、さう云ふ風に考へて來ると、萬有還金術ではないが、此世の中に金儲の種ならざるはなしサ」

岡辰老人は、極めて熱心な調子で森羅万象、悉く金儲の材料ならざるはなしと云ふ説を、高調するのである。此調子で行くと、殆んど掴み處のない話となりさうなので、何か卑近な實例に引戻したいと、私は咄嗟に考へたのであるが、老人は其れと見て取つたと見えて、大きく點頭きながら、

「ウム、さうく、もう一つ材料がある、それは、今話した土を材料にして、凡ゆる金儲を考へると同じ様に、先づ手取り早いのが人間の心と云ふ材料がある」

「心と云ひますと……？」

「サア其れが此手紙だよ」

恐しく部厚な封筒を放り出した。

「是れだよ君、人を喰つた話サ、是れが金儲々々と云つて種々な話をするもんだから、俺を當て

こすつた様な手紙でネ……」

と、笑ひながら何枚かに綴られた用箋を引張り出して、

「読んで見給へ、中々面白いぜ」

と、私の膝へ乗せた。

鐵道株の誘惑

この不景氣な世の中に、儲かつて仕方がないのは私だけだらう。

それはつい近頃、政友會の北海道支部長、代議士木下成太郎氏が、なが雨の崖崩れで、裏の山からチリ一硝石が飛び出し、久原と三井が一億で買はう、一億五千萬圓で引取らうと、奪ひ合ひの交渉をして居ると云ふ素晴らしい話や、廣島縣出身の丸山某と云ふ三十八になる青年が、カリホルニヤで買ひ入れた赤茄子畑から石油が噴き出し、一ヶ月三百萬弗とかの採掘料を取つて居ると云ふ耳寄りな話が、噂の種となつて騒がれて居る世の中に、之はまた山から掘り出したのでもなければ、地面から湧き出したのでもなく、減給だ、失業だ、失職だ、破産だと、青膨れになつて

居る人間世界から、巧妙な熊手で掻き集めて居るのだから、手柄話の中へ加へて貰つても宜いと思ふ。尤もそれは私一人で儲けて居るのではない。私より十倍も儲けて居る人が澤山ある。けれども此人達は左程自慢にして居ない。それなのに其一割しか儲けて居ない私が、こんな話をするに云ふのは借上の沙汰だ。しかしそれには理由がある。私の十倍も儲けて居る人達が私を羨ましがつて居る。うまくやつた、お前は賢いと云つて居る。斯うなると一體誰が儲けて居るのか一寸判らなくなる。それは私にも疑問なのだ。とは云ひながら事實上私は儲けて居る。

「何でそんなに儲かるのか」

と、腰を浮かして聞きたいだらうが一寸待つて呉れ、話すには順序がある。金貨の音がザクザクする結果だけでは合點が行くまい。退屈でも初めから聞いて貰ひたい。

と云つて、草深い片田舎に、百姓の子と生れて少年の頃より聰明叡智、なんて立志傳めいたものではない。ついこの春の頃からである。それ迄は矢張り御多分に洩れぬ青膨れ組の失業者だつた私である。尤も四五年前までは神奈川縣でも一寸名の知れた地主で、親の代から賣藥を渡世として居た。

ところが人間落目になると怎うすることも出来ないもの、御先祖様の御位牌だけを守つて居れば宜かつたのに、東京から鐵道が敷けると云ふので、其發起人の顔觸れや、株主の名前にすつかり惚れ込み、無けなしの貯金を鐵道株に乗かへた。尤もそれには鐵道建設利息配當と云ふのが五分ついて居た。郵便貯金は四分八厘、それに比べて二厘の得がある。それに將來開通ともなれば八分一割は必ず行はれる、株の値が上がる。それでも儲かると、夢に夢を繼ぎ足して胸算用の幾月かを有頂天になつて居た。

愈々軌道敷設の實測が初まる。土地の人達は停車場の運動だとか、運送店の出願だとか、掛茶屋賣店等いろくな利權に浮身を寔して居る。そのうちに第二回の拂込みが如才なく行はれた。私は現金の有りつたけで株を持つたのである。第二回の拂込みは無論地所を擔保にして調達するより他はなかつた。

軌道は愈々敷かれた、試運転の電車が三哩手前の〇〇驛まで行はれた。第三回の拂込が來た。私はもう鐵道を信するより外はなかつた。擔保の地所を賣拂つて拂込を済ました。軌道は日に日に延長されて、終に其鐵道會社は立派な營業を行ふ段取りにまで漕ぎつけた。沿道の町村民は文

化の惠澤に感謝した。

——と、鐵道會社は増資を發表した。新しい電車が青嵐を衝いて走つて居る。用もないのに物珍らしく乗り廻はす町村の人達は會社の素晴しさを嘆稱し合つた。増資はすらくと行はれた。舊株主には新株募入權利が附與されて居る。私はそれを特權の一つとして誇りやかに引受けた。しかし引受けたもの、拂込む金がない。残つた地所を何とかしなければならなかつた。すると、鐵道會社の傍系として現はれた沿線土地企業會社と云ふのが、頗る有利に土地の賣買をする。と云ふ丁寧な規則書を送つてよこした。見るとなるほど夫れは從來取引される土地の値段より幾割かの高率を示して居る。私は早速それへ申込んで残らず地所を土地會社へ賣却した。最もそれには相當の理由があつた。第一に株の拂込に充當する必要に迫られて居ること、第二には小作爭議や税金の關係で地所が不生産的になつて來たこと、第三には假令五分の利息配當でも土地よりは確實に得られると云ふこと、等であつた。

かうして私の財産は悉く鐵道株となつてしまつたのである。私は土百姓から大實業家になつてしまつたやうな氣がした。紺サーヂの洋服も作つた。磊落平の袴もこしらへた。

神經衰弱の藥

東京からの何十分と云ふ村になつた私の村には、いま迄想像もつかなかつた緑色の洋館や、赤瓦の屋根がポツ／＼建ち初めた。私の地所だつた畑には「分譲地」と墨痕鮮やかに記された白い棒杭が立つた。そして見馴れないオールバックの青年やワンピースの婦人などがチラホラするやうになつた。新しい家が一日に何軒平均と云ふ勢ひで建つて行つた。素晴らしい景氣である。私が賣つた時は坪七八十錢見當だつた地所が、一躍して十五圓だの二十圓だのと云ふ値になつて來た。私は逃げられた魚が鼻の先に泳いで居るやうに見えてならなかつた。

それで反對に私の持つて居る鐵道株は一向に値が出ない、ともすれば拂込値段が切れさうになる。土地の人達はもう電車なんか珍らしくなくなつた。當然のものが當然に走つて居るとしか思つて居ない。そのうちに「私鐵經營難」と云ふやうな記事が新聞に出るやうになつた。阪急だの南海電車だの東武電車だのと云ふものゝ配當を夢にして居た私は、其慶記事が出る毎に幾度眼鏡を拭き直して見たか知れない。しかしそれは事實だつた。鐵道の配當は三分に減つた。株の値は

難なく拂込を割つた。半分になつた。三分の一になつた。それは私のだけでは無い。會社の株だつて三分の一になつてしまつたのだ。何萬と云ふ大きな株を持つて居る社長の損害は大へんなものだらうが、社長はまだ他にも澤山な事業を持つて居る。鐵道だけを命に全財産をかけてしまつた私としては全く致命傷だつた。

それにしても坪七八十錢で賣つた私の地所を、誰が坪十五圓だ、二十圓だと云ふ筈な値で賣つたのだ。會社の傍系會社たる土地會社の社長は誰だ、それは矢張り鐵道會社の社長と同じ名前である。

「俺達の缺損は誰が儲けたんだ」

私は斯う云ひたくなる。けれどもこんな論議立をしたところで初まらない。自棄か諦めか、さうするより他に途がなかつたのか、私は幾らにもならない鐵道株を捨値に叩き賣つて東京にふらり出て來たのが此春である。

流石は東京である。どんな商賣でも暮しが立つ、人の靴を磨いたゞけでも一家五人位の生活は立てゝ行かれる。私は何となく寶の藏へ飛び込んだやうな氣がした。

「何か一つ呀つと云はすやうな商賣がして見たいな」

それは大それた考へかも知れない。しかし何となく大事業が出来るやうな気がする。私は先づ小石川の××ホテルと云ふのへ腰を落つけた。

「鐵道會社で損をしても土地會社で儲ければ五分だ」

私は全財産を捨て、これだけの知識を買つたのである。この知識を利用しなければ嘘だと思つた。けれども今は流轉の青膨れ組である。捨つべき資本もなければ、拾ふべき手掛りも無い。

朝の八時前にはホテルを飛び出すやうなものゝ、さて何と云ふ目的もなく、町の中をブラブラするだけのことである。だがそこは人情だ、紫地に「クスリ」と白く抜いた看板だけが矢鱈と目につく。

「この政府ぢや景氣がよくなりつこないよ、大きな會社だの銀行だのばかりを保護してやがる。金持だけ大儲けをさせやがつて貧乏人には身代限りをさせくさる」

あまり賣れさうもない藥屋の親爺が泣くやうな聲で斯う云つたのは私が入つて行く少し前だった。

神経痛の塗布藥かなんかを買つた青しよびれた男が勘定臺の前に腰を下ろして痛切な合槌を打つて居た。そこへ何の氣も無く飛び込んだのが私である。

「何か神経衰弱によい藥はありませんかな」

ポケットから紙入を抜き出して掌を軽く叩きながら訊ねると、

「へいへい」

と、親爺は急に作つた笑顔で私を迎へた。神経衰弱の藥と云へばクスリ屋の玉手箱と云はれる強精劑である。一週間分五圓だの十五日分十圓だのと云ふ高價な値段がついて居るので、あんま膏やヒビのくすりとは段が違ふ。彼はもう五圓なり十圓なりの客をつかまへたやうに咽喉のあたりをグビくさして居た。

出鱈目の會社

「これが近頃賣出した強精劑です」

美しい表装をセルロイド紙で包んだ××と云ふ箱を出して親爺は、素早く定價のところを讀ん

で居た。

「十日分五圓」と云ふのである。私は別に欲しい薬ではなかつた。只東京のクスリ屋はどんな店構へでどんな商賣をするのか、それを見たいだけのことである。氣が無さうに其箱をいちりながら薬戸棚を見廻して居ると親爺はそれを氣に入らぬものと見て取つたか、

「何なら手前共でこしらへて居る強精劑がありますが如何です、これなら廣告費がありませんから、すつと割安になつて居ります」

「廣告費……？」

「へい……お客様はみんな廣告を服んで居るのですよ、私のこしらへる薬なんか××よりはすつと品質が宜いのですけど一向に賣れません」

「は、あ、あんたが作る品は一般廣告して居る品よりもすつと良いのだが、廣告しないから賣れないと云ふのですな、そんなら廣告してうんと賣つたら宜いでせう」

「とんでもない話、薬を廣告するには生やさしい金では駄目です、薬屋の大きなのになると新製品を賣出すのに何萬と云ふ金を使ふんですから……」

「その金はお客が拂ふのか、あんた方が拂ふのかね」

「さあ、二人で拂つてるんぢやないでせうかな、會社は何でも素晴しく儲かるんですから」

「ふうん……？ つまらん話だね。して見るとどうだらう、現金で製造元から取引するやうにしたら、其會社の儲けをいくらか分けて貰ふやうにならんだらうか」

「そりやああなた、屹度やつて呉れます。何しろ私達の店へかうやつて並べられてある薬は、中には委託されたものもあるし、現金でなければならぬものもあるし、いろいろですが、總て現金直取引となればすつと割がよくなります」

「そんなら合同したらどんなものです、此區だけの賣薬屋が合同すれば現金で品物を安く澤山に仕入れることが能る」

親爺は表通りの電車を眺めながら此名案を玩味した。

「なるほど、これは宜いな、仲間同志でお互に他人を出し抜かうとして揉めでも出来れば別ですが、そんな事のないやうにすれば出来ない事は無いやうですな、それに品物の融通がつくし、資金は固定しないし」

彼は獨り言のやうに呟いた。私は存外分解の早い親爺だと思つた。

「その通りです、資金の回轉率と云ふ奴は、法外なパーセンテージを出すものだからね」

私は斯う云つて薬の方は忘れてしまつたやうに腰を下ろした。手持無沙汰になつた青しよびれは力の抜けた腰つきで歸つて行つた。

「時に御主人、この店をいくらならお賣りになります」

それは此親爺に取つては驚くべき質問であつたらう。自分の耳を疑ふやうに勘定臺の側へ坐り直した親爺は、

「何とおつしやいます」と眼をシパ／＼さした。

「いや、この商賣をいくらなら賣るかと云ふのです」と私は繰り返した。親爺は店の中を一通り見廻して居たが、

「さうですね、品物と雑作の外に得意があります。それから私のこしらへてゐる薬の権利が三つほどあります。棚卸しをして見なければ幾らとも申上げられませんな」

「それはさうだが……」私は何となく滑稽を感じた。別に之れと云ふ目的があつて話し出したこ

とでもないのに、何だか實になりさうな氣がし出して來た。

「しかし、眼をつぶつて考へたつて判るぢやありませんか。私はつい先達まで賣藥屋をして居たのですが、先づこちらあたりだと、商品と店の雑作で五百圓、得意の三百圓、得意の三百圓は少し高すぎるかな……」

私は半ば親爺へ云ひかけるやうに半ば獨り言のやうに呟いて見た。すると親爺は急に慾の皮が突張つたやうに、

「千圓なら宜いでせう」

と、膝を乗り出した。私は面白くなつて來た。どう云ふ結果になるか、そんなことは考へる餘地なしに、

「いや、それでは會社を欺くことになる」と冷淡に云ひ切つた。親爺はひどく興味を感じたものらしく、

「え……？ 何の會社です」と勘定臺へ腕を突いてにじり出た。

ファイに十萬圓

斯うなつて來ると私はもう出任せな話で進めて行かねばならなかつた。

「私は實はこの小石川の小さな賣藥店を合同して一つの會社を拵へるつもりなんです、そこで先づ第一に五つか六つかの店を即金で買収しようと思ひ立ちました。それから店の經營は無論商賣の明るい人に依頼する。即金でない場合は其店と商品と得意を見積つて會社の株を持たせる。こんな風にして廿萬圓の大會社が出来るのです。さうすれば商品の仕入が安くなる、資金の回轉率が早くなる。つまり能率増進、經營の合理化と云ふのが實現されるのです」

「なるほど、すると私が店を賣りもせず、會社の権利も取らないとすれば、あなたの會社からひどい目に逢はされる譯ですね、貧乏人はいつも此塵目に逢はされるんですな。しかしそれはさうと、あなたはどういふ風に會社をおやりになるのですか」

親爺はかなり熱心になつて來た。私の出任せも何とか目鼻をつけねばならなくなつた。

「それは立派な會社を合同する場合と同じやり方です。例へば五六人で持株會社を組織する。二

十萬圓の會社が出来たら、私が新會社の株券を八百圓なり千圓なり、あなたに拂つてあなたの店を買収する。それから店の雜作や體裁を新しくして、あなたを其店の主任にする。他の店も之と同じ方法で買収するのです。唯買取價格が、店の位置、商品の多寡、帳簿に現はれた營業高の如何によつて定めるのですから、店の主任となつたあなたには今日の収入と同額の給料を支拂ひます。さうして三ヶ月毎に決算して利益を配當する、と云ふのです」

「は、あ……して見ると店の商賣は現状維持で、私が會社へ八百圓なり千圓なりで賣渡しても、従來の収入と一切變りなし、其上配當が貰へると云ふのですな、少し話がうま過ぎるやうだが、會社はそれで何で儲けようと云ふのですか」

無理の無い質問である。私は出鱈目の中から眞實に觸れるものを感じた。凡て人間は心にもないことを云つて居るうちに、それが眞實となつて來る場合が多い。私は眞劍にならざるを得なかつた。

「御尤もです、しかし今日あなたが仕入れて居る賣藥の原價は何ほどですか。香水は、石鹼は、はみがきは、舶來の藥は、みなそれ／＼掛目が違つてゐるでせう、それを平均二割五分と見て、

一ヶ月千圓の賣上げで二百五十圓があなたの所得です。しかるに會社が現金拂ひと大量契約を以てしたらどうなりませう、少くも五分乃至一割の勉強は敢て苦痛ではありますまい。そこで一割の値引は一割の利益を齎らします。一ヶ月一回の回收が行はれば、年十二割の利益です、お判りになりませんか」

私の説明は彼の胸に一つく額きと同時に泌み込んで行つた。

「店では何ですから、汚ないところですが奥へいらして下さいませんか」

親爺は立つて私を奥座敷へ案内した。私はお茶と羊羹を御馳走になりながら此處でも同じやうなことを説明した。親爺の頭にはとつくりと合點が行つた。八百圓の株を貰つて店を賣りつければ、主任となつて今日と同じ収入が得られるばかりでなく、大量取引から得られる利益の配當まで貰へると云ふのである。これなら店を賣りながら其店を追ひ出されるのでなく、其儘にして素晴らしい儲けが出来るると云ふのだ。親爺は額を叩き頭を撫で、欣んだ。「及ばすながら私も奔走します、そして是非この計畫を一日も早く實行して下さい」親爺の方が私より乘氣である。私は考へた。

「假りに一軒の藥屋が一日二十圓の賣上げを見るとして其五分で一圓、百軒あつて一日百圓、一ヶ月三千圓の利益が出て来る。一年三萬六千圓、二十萬圓の會社にしても一割八分の利廻りになる。だが待てよ、一軒當り平均千圓の買收價格としても、百軒なら十萬圓の株券で済む、二十萬圓の資本と云つたが、あとの十萬圓はどうすれば宜いのだ。俺のものか、會社のものか、其株を製藥會社へでも賣りつければ、必ず引取つて呉れるだらう。さうなると其株から生れた金は、一體誰のものになる……」

何となく元氣づいた親爺が、いろいろお世辭を振撒いてゐるうちに、私は十萬圓のことばかり氣になつてならなかつた。

株式新報の奉仕

「は、あ、それでお前は儲けたのか」

と、人々は云ふだらう、しかしさうではない。勿論地道にやれば之れで充分儲かるのだが、百人百色の世の中である、中には私の十萬圓を嗅ぎつけて來たのもあるが大抵は株のあやつりに興

味を覚えてしまひ、遂には新東や鐘紡にまで浮かれるやうになつてしまつた。元々資金を拂込んで出来た會社ではなし、只團結だけを資本とした賣藥會社である。團結の分子がまぢくになつて、株や相場にばかり夢中になつて了つたのでは、會社としての存在價値が危ぶまれて來た。皆は考へたのである。商賣は百人百色だが、相場で儲けようといふのは百人一色である。それなら寧ろ百人一色の仕事をするに限る。

「これが私をして今日熊手で搔き集めるほど金を儲けさして呉れた原因なんです」

と、私ははつきり斷つて置きたい。と云つて私は今日迄新東一枚買つたことがなければ、鐘紡一枚賣つたことも無い。それなのに、兜町の株式取引所へ近く事務所を借入れたのはどう云ふ譯か、勿論一つの目的を持つからである。

——××株式新報——

この金看板を掲げてから一ヶ月餘り経つた。四六四倍二つ折、タブロイド型の新聞で、毎日の株の値段や、出来高の内容などを書いて居る新聞で、株屋が得意先へ送る氣配狀と何等異なるもの無いのだが、只變つて居るのは廣告欄だけである。

株式賣買案内

新東十株明日相場引値にて買渡し、株券現金即座取引決済（姓名在社〇〇番）

と云ふやうな廣告が出る。案内廣告と云ふものは一流新聞にも澤山出て居るが、賣家貸家、地所を買ひたし、土地を賣りたし、と云ふ廣告は見受けられても、株の賣買は一行も見當るまい。其癖株券や公債の買ひたい人、賣りたい人は地所家屋どころではない。百人が百人、千人が千人毎日でも賣買したいたらう。然るに一般新聞の廣告面へは現はれない。只株を賣らう、買はうと云ふ人は、現物店なり取引仲買人なりへ少からぬ口錢を拂つてからでなければ行はれないものと考へて居る。

自分のものを賣つたり買つたりするのに、他人に口錢を支拂はなければならぬと云ふ理由がどこにある。相對で賣買が出来ないものか、株式の名義書換は株屋が中へ入らなければならぬものか、そんなことは全然無い、株でも公債でも自由に賣買して差支ないものである。

と云ふのが××株式新報の趣旨であつた。「君、それは君だけの考へだよ、差金賣買と云ふもの

は、取引所法に依つて堅く禁じられてあるんだから、君の議論は無茶だよ」

或る日訊ねて来た相場師は鼻の先でニヤ／＼笑つた。「さうですか？ しかし一度案内廣告をお試しになつては如何です、いや取引は本社の奉仕部で責任を持つてお取扱ひ致します、何ですつて……？ 手数料？ とんでも無い話、何しろ奉仕部のやることですから、一切無料です」

これだく

客は少々興味を感じて来たらしかつた。

「ほう、これは面白いね、それでは試しに明日の前場の引値で新東十株だけ買ひつけて見ようか」
「へい／＼畏りました。それでは茲に案内廣告の原稿紙がありますから、これへお書込み願ひます、いや三行で結構でございます。それから手前共の奉仕部へお取引のお任せを願ふのでございまして、違約金保証として全額の五分だけをお預り致したのでございますが」

「違約金……？ 違約金つて何だい」

「はい、違約金と申しますのは、明日の前場引値であなたが買受けなさいますとしますと、そ

れまでに現金を揃へて株券引換に取引をしなければなりません、あなたが其時現金を御持参下さいればそれでよろしいのですが、萬一時間までにお出でがない時は違約金として先方へ渡してやらなければなりません」

「ふむ、なるほど……」

「それから先方で株券を其時間までに御持参下さいませんと、先方から違約金として矢張り五分だけ頂きましてあなた様の方へ差上げなければなりません」

「は、あ、して見ると假りに新東十株とすれば、時價九十圓として九百圓、其五分だから四十五圓を君のところへ賣買双方で預けて置き、契約履行をしない場合は、違約金で決済すると云ふのだね」

「左様でございます、つまり賣と買との二人が四十五圓宛の金を出し、決済出来なかつた場合に違約金として取り合ふと云ふのです」

「なるほど、賣つた人は高くなればこそ金を持つて取りに来るが、安くなると違約金だけで逃げられてしまふと云ふのだね」

「さうです、ですから相場ばどれだけの開きがあつても四十五圓の違約金處分で決済すると云ふのでございます。尤も東電とか浅野セメントとか云ふのでしたら、時價二十五六圓ですから十株で二百五十圓、其五分とすれば十二圓五十錢の違約金で双方取引が出来るのでございます」

「さうか、判つた。つまり四十五圓でも十二圓五十錢でも、分相應な取引が出来ると云ふのだらう。だがしかしそれでは取引所が黙つて居まい、いや、其筋の取締りが目を光らすだらう。賣と買との二夕目を置いて、四十五圓や十二圓五十錢のやりとりをするやうなものだ。その堂元とも云ふべき君の新聞は取締まれるぜ」

「何のあなた、私共は一文の手數料も申受けません。奉仕なんです。これが口錢でも取るのです。たら商賣として取締まれるでせうが、讀者や廣告主へ便宜上奉仕して居るのですから營業でも何でも無いのです。どうぞ奉仕部委託規定を御一覽下さいまし」

「ふむ、なるほど、一切無手數料とあるな、それで君の方の手數料ぢやない、収入はどうなるんだい」

「私の方の収入ですか、それは三行の廣告料だけでございます」

「廣告料……？ 廣告料はいくらなんだい」

「はい一件三圓でございます、尤も姓名在社とする匿名料は二圓増で頂きます」

「ほう、三圓とは安いな、匿名料が二圓と云ふと、これが手數料になるのかな」

「いや、それは帳簿方や電話照會の手數料でありまして、取引手數料ではありません」

「なるほど、しかし賣る方も買ふ方も廣告は出さなければならんのだね」

「左様でございます」

斯くて××株式新報の廣告は日に／＼何件となく殖えて行く。廣告外交は銀行に會社に役所に商店に、有ゆる階級の人々へ奉仕して居る。小は十圓から大は五十圓、七十圓と、違約保證預り證は何枚となく發行される。賣りたき廣告で違約金を取る人、買ひたき廣告で違約金を取る人、賣買廣告希望者は次から次へ興味を持つて行く。一體誰が一番儲けるか、私はもう説明する材料がない。

十銭の金儲け

「どうだ君、可成り皮肉な手紙だらう。是れなどは人間の根性を利用した金儲で、正々堂々たるものと云へないが、あり得る事だよ。政府が金持を擁護する爲め、取引所法を制定して株券の差金買は絶対にいけないと云ふ様な事で、誅求する爲めに、いつの間にか、取引所法を無視した商法規定の違約金處分を利用する方法が生れてしまふ。一頃貯蓄銀行法や無盡法が八ヶ間しくなつた時分に、匿名組合の規定を利用して、慘々に庶民金融を濫用したものがあつた。其れに引つかゝつたのが人もあらうに、名貯金局長と云はれた天岡直嘉氏だ。月給を取つてポツ／＼貯めた金も、ねこそぎつき込んでしまつて、終には勳章を賣る様な事件迄惹き起した例があるぢやないか。斯う考へて来ると、金儲の穴は、さうした人間の弱點にもかなり残されて居る様だ。そんな事はマア考へん方がいゝ」

「併し廣告料と手数料を混同さして、小さな金を儲けて行くと云ふ方法は面白いぢやアありませんか」

「其れに就いて、米國の話だが面白い問題がある、或る小都會に一人の馬鹿者があつた。町の人は、其人間が来ると、五十銭銀貨と十銭銀貨を出して、お前にどれでもいゝ方をやると、かゝつたものだ。すると此馬鹿者は十銭銀貨の方を取つて、俺は此方がいゝと云つて喜んで貰つた。多くの人は其れを面白がつては、つまらない用事を云ひつけて、サアお前どつちがいゝかと云つては五十銭銀貨と十銭銀貨を出して見せる、相變らず其男は十銭銀貨を取つて行く。毎日斯んな事が繰返されるので、紐育から行商に來た或る男が不思議に思つて、今度は五圓札と壹圓札とを見せて、お前どつちがいゝと尋ねた。すると其馬鹿男は、行商人の顔をシゲ／＼見て居たが、そうつと五圓札の方を取つて、私これがいゝと懐に入れてしまつた。行商人は驚いていきなり其馬鹿な男の胸倉を取つて、お前は今迄五十銭銀貨と十銭銀貨を並べて見せれば十銭の方を取つて行つたのに、今日に限つて何んだつて五圓札の方を取つて行くのだと尋ねると、其馬鹿者はニコ／＼笑ひながら、ナニあなた、私だつて錢勘定位知らない譯ぢやアありません。私が町の人達に向つて、いきなり五十銭銀貨を取つてしまつたら、其れ一度限りで後は誰れもかゝつて呉れる者はありません。錢勘定を知らない振りをして十銭銀貨を取つて居る爲め、町の

人は面白がつて、私を戲つて居るんです。私は戲はれる度に十銭になるんです。お前さんは紐育の人だから明日も来てからかつて呉れるとは思ひません、だから五圓の方を頂戴するんです」

「ナル程面白い話ですナ」

「だから此男は馬鹿ぢやアなかつたんだ。ホントに金儲の上手な奴だ。大抵の人は五十銭銀貨を一つ取つて、其れきりになつてしまふのだが永久に十銭銀貨を取らうと云ふ様な料簡で、商賣をしさいすれば、必ず成功しないと云ふ事はないサ」

「して見ると、ほんとうの金的と云ふものは、十銭銀貨にあるのですナ」

「さうだよ、十銭銀貨さへねらつて居れば先づ金儲け疑ひなしだネ」

遠く省線電車の走る音が聞える。豆腐屋のラツパが聞える。もうソロ／＼夕飯の仕度になるらし。

圓 錢 術

三百五十萬圓

壹萬圓の札束三百五十把、机の上に高く積み上げて、

「どうぞ御自由にお使ひ下さい、無條件です。使途はあなたにお委せ致します」

一代の蓄財王安田善次郎翁、どこの風の吹廻しか、ケロリとした顔をして、時の東京市長後藤新平伯の顔を見たことである。大風呂敷の尊稱をさへ敢て有する後藤さんもこれには驚いた。

「三百五十萬圓ですネ」

思はず念を押したのも無理はない。

「さうです、大東京の都市計畫は目下の急務です。あなたなら必ずやり遂げることゝ見込んでこの安田が一切の準備費用を持たうと云ふのです、存分にやつて下さい」

「御厚志だけは感謝します、それにしても一應内務省の方へ届出で願ひませうか」

「いや、内務省だ、東京府だと云ふやうなことをすると手続き其他が面倒だから、匿名氏の寄附と云ふやうなことにして、あなたの御一存でお取はからひが願ひたい」

後藤さんはあんまりな意外に昂奮した。

「それにしても此の後藤に三百五十萬圓と云ふ大金を無條件で……」

「はッはッはッは、金と云ふものは厘毛のうちこそ尊いもの、また重んぜねばならぬものですがかうした萬金となると砂埃に等しいものです。御遠慮なくお納めが願ひたい」

それは全く奇蹟のやうである。桂内閣當時、財団法人済生會を創立するに當り、故大木遠吉伯が使者となつて應分の寄附を勸説したが、いつかな承知しさうにもなかつた安田翁である。また澁澤榮一翁が、芝公園の協同會館設立に斡旋した際、翁を説いて資金の寄附を懇請した時も、首を横に振つた安田翁である。それがいま手の切れるやうな紙幣で、耳を揃へた三百五十萬圓、無雜作にボンと投げ出されたのだから、後藤さんの眼がバチバチするのも無理は無い。

しかし、それは奇蹟でも何でも無い。當時東京市長としての後藤新平は、大都市計畫に八億圓

と云ふ老大な豫算を計上して、大々的に東京の發展を試みようとして居たのである。茲に於て機を見るに敏なる安田善次郎翁は、後藤伯の計畫を授け、例の八億圓を一手に引受けようと云ふのであつた。

其後、後藤伯が市政調査會を設立し、八億圓計畫を發表すると間もなく、安田翁は後藤さんの邸を訪問して、

「八億圓と云ふと少し小さくはありませんか、假りに十ヶ年計畫としても年分八千萬圓ですむ、それなら別に他人の力を借らすとも、私の手だけで充分です」

と大きく出た。天才的胸算用は、彼が廻轉の腫の中に分厘の誤算もなく現はれた。それは全く安田今日の信用を以つて、十年間に八億圓の金を集めると云ふことは別に難しいことではなかつた。若し東京市が、市債として八億圓の金を借りることになれば、彼は直ちに三府四十三縣に安田貯蓄の支店を設置し、零細資金の吸收到努める。預金に六分三厘（當時の利率）の利子を拂つたところで、市の方へ八分で貸付ければ、二分三厘の利益が生まれる、八億圓の二分三厘と云へば千八百四十萬圓である。營業費其他を引いたところで莫大な數字が残る、三百五十萬圓の金が

煙になつたところで、尙且つ素晴らしい儲けである。

いま演壇に立つて「金利の働き」と題する講演を續けて居る岡辰老人は、安田蓄財王の實例を説いて水を一口呑んだ。そして尙ほ續けた。

——諸君、我々の持つ十圓の二分三厘は二十三錢である。然るに安田翁の胸算用になると千八百四十萬圓となるのである。徒らに濡手で粟の金儲けに首を伸ばす人は、先づこの二分三厘に冷静なる考慮を要する。元來日本人は利殖觀念に乏しい。其實例としていま茲にある一つの數字を説明して見よう——（拍手）

自分の金へ利息

餘ほど物馴れた話である。彼は樂屋の方へ向つて、今日の新聞を一枚要求した。やがて一面二面と見て居たが、心當りがあつたやうなところを四ツに折つて、

——諸君これである、これと云つたところで字が小さいから判るまいが、これは自宅へ歸つてから精細に見直して貰ひたい。即ち不動貯金銀行の第五十九回決算報告である。不動貯金と云へ

ば直ちに三年貯金を聯想する庶民金融機關としては尤も信用のある銀行である。いま假りに定期積金としてある科目の數字を調べて見よう、驚くなかれ三億六百四十六萬二千五百七十七圓七十五錢と云ふ數字を示して居る。石の上にも三年と云ふ心掛けの勤勉人が積上げた數字とすれば尊敬の念にかられる、然るに……

と、彼は咳一咳して、

——定期積金者に對する貸付金と云ふ科目を一覽して貰ひたい、二億百九十六萬四千五百八十九圓七十一錢と云ふ數字がある。三年の辛抱また難い哉、彼等は遂に約三分の二は預けた自分の金を借りて使つて居るのである。更にこの利廻りを打算して見ようではないか、辛抱の出来ない税金として、彼等は幾何の税金を不動貯金銀行に支拂つて居るか、興味ある問題だと思ふ。御承知の如く、不動貯金銀行は三分一厘の利子で預り、九分の利子で貸付けて居る。この差額即ち五分九厘と云ふものは、銀行の營業費であり且又利益である。これを標準にして打算して見ると、銀行が拂ふ定期積金三億六百四十六萬二千五百七十七圓七十五錢の利子は九百五十萬三百三十八圓五錢二毛五朱であるのに、貸付金二億百九十六萬四千五百八十九圓七十一錢から受取利子として

九分即ち千八百十七萬六千八百十三圓七錢三厘九毛の收入になる。

さすればこれだけで八百六十七萬六千四百七十五圓二錢三厘六毛五朱の差が銀行の受取分となる。尚ほこの他に銀行の手許へ残る金に積金と貸金の差額一億四百四十九萬七千九百二十八圓四厘と云ふものがあるから、これを五分五厘に廻る公債にして置くとして、三分一厘の利子を預金者へ戻しても差額二分四厘と云ふものが銀行の收入となる。その金の二分四厘は二百五十萬七千九百五十圓二十七錢二厘九毛六朱になる。

これを總決算すると積金利子と貸金利子の差益八百六十七萬六千四百七十五圓二錢三厘六毛五朱に加へること二百五十萬七千九百五十圓二十七錢二厘九毛六朱だから、銀行の收入は千百八萬四千四百二十五圓二十九錢六厘六毛一朱となるのである。これを拂込資本金五百萬圓に比例すると二十二割の收入となる。

勿論この他にいろいろな預金や積金等もあるから、單にこれだけで總てを律することは出来な
いが、預けた自分の金を借りて利息を逆に拂ふと云ふやうな不思議なものが、大部分を占めて居ると云ふことは一目瞭然であるまいか。斯くの如く其世話料として銀行の營業費は膨脹し、利益

は増進すると云ふに至つては、日本人が如何に利殖觀念に乏しいかと云ふことが判るのである。

——拍手起る。

——殊に銀行では募集其他勧誘費に積金の一分八厘の費用がかゝると云はれて居る位だから、三億の積金に對し五百四十萬圓もの世話焼料を費して居るのである。——

——なんと諸君、利殖は特に選ばれたる人にのみ與へられる知識ではない。常識として何人も心得て置かねばならぬことである。

と結論した岡辰老人は額の汗を拭きながら壇を下りた。

代つて現はれたのは、二十二三の青年で、五分刈頭に飛白の着物、學生のやうでもあり小商店員のやうでもあり、少しおどおどした風で叮嚀にお辭儀をした。

一 錢倍の緣起

「何だいあれは……？」と誰か云つた。

「株屋の小僧ぢやないか」と云ふものもあつた。青年は懐ろからクロス菊判の書籍を出して、

もう一度お辭儀をした。

「何だらう」そつちでもこつちでも嘸き合ふ聲がする。聽て青年は震へるやうな聲で、

——私は代理です、父が伺ふのですけれど、昨日から少し具合が悪いですから、失禮致します。と云つて私には皆さんにお話しする程の経験もありませんし、またお話しする材料とでもありません——（尤もだと云ふものあり、青年は少しドギマギして）ですから、私は父の日記を讀んで今日の責を塞ぎたいと思ひます。（期せずして拍手起る）

青年が開いたのは大型の當用日記である。

○月○日、晴

今日は朝から家に居て本を讀んだ。この頃の圓本は字がこまかくて讀むのに骨だ。けれども西鶴と云ふ人は名文家だ、讀んでるうちに何となく引込まれてしまふ。中でも俺達の讀物は日本永代藏だ、うまいことが書いてある。泉州平間寺の觀世音、靈驗あらたかにして、參詣人が絶えなかつたさうだ、そして其寺のやり方が面白い、縁起の宜い金だと云ふので參詣人に一錢づつ貸してやる。借りた人は來年二錢にして返す、御利益は一層あらたかだと云ふ評判で、日に日に參詣

人が殖えるばかり、するとある日二十三四の男が來て、遠いところの者だに依つて、一貫文だけ貸して呉れと云ふ、お寺では驚いた、今迄一錢づつしか貸さなかつたものが、一度に一貫文貸して呉れと云ふのだから問題になつた。寺中でいろいろ相談の結果、折角のことだから貸さうではないかと云ふことになり、たうとう一貫文の要求に應じた。

この男は江戸の小網町で船問屋をして居たが、その金を借りてから縁起がよいと云ふ觸込で、沖へ漁に出る船子共へ金儲けの種錢だと云つては一錢づつ貸してやつた。何しろ一錢借りても來年になつて倍にしてやれば宜いと云ふのだから大した負擔でない。我もくと競つて借りたものだ。この一年倍を十三年つゞけて勘定して見ると、八千九百九十二貫になつたと云ふのだから驚く。全く金の殖える力ほど面白いものはない。昔の諺に百里の道は九十里にして半ばなりと云ふことがあるが、金の方はそれと反對で、千兩の金の半分は百兩なりだ、最初の十錢や一圓は目に見えぬ砂埃のやうだが、百兩と纏つて來ると同じ一割でも十圓になる。百圓の一割は十一圓になる。かうして殖えて行く金が九百圓になると、あと一割の九十兩で千兩に十兩足らず、次の一割になればもう千兩を突破してしまふ。誠に金は細いうちが大切なもの、平間寺の金だつて一

錢を二錢にして返すと云ふのだから、別に氣にも止めないが、利廻りにすると十割だ、いくら靈驗灼然だからつて、一萬兩の金を借りて、翌年二萬兩にして返せと云つたら、誰だつて見向きもしまし。金を殖やして行くコツはこんなところにあるのだ。

社債と雞卵

○月○日、朝雨後晴。

今日は久し振りで田舎から妻の父が訪ねて来た。田舎者にしてはハイカラな、カステラの折なんか土産に持つて来たと思つたら、中には粃殻が一ぱい這入つて居て、一つ並べに雞卵が植わつて居る。生み立てだから直ぐ食べると云ふ。なる程綺麗な卵だ。田舎の親爺め、土産に少しでも箔をつけようと思ふものだから卵の講釋だ。雞は大抵二百六十個位の卵を産むともう駄目ださうだ。二百六十の卵を生むには一年餘りかゝる、一つ三錢に賣つても七圓八十錢の稼ぎをする。そして飼料は大抵一日六厘と見なければならぬ。これが一年半として三圓二十八錢かゝる。さうすると四圓五十二錢の利益が生まれる。そして其親雞を肉食用に賣つてしまふ。これがどんな

に安くとも二圓にはなる。田舎に居るものゝ利殖はこれに限る。一つ三錢の卵が雞になつてから面倒一つで六圓五十二錢になるのだから、こんな旨い仕事はないのだが、養鶏をやる人は大抵失敗するのは何故だらう。その理窟が判らないと、燻ぶつた雁首の煙管から、あやめの煙をフカリフカリとふかして居る。

そこで俺も云つてやつた。東京では地面が狭いから雞を飼ふ譯には行かないが、其代りそれに似たやうなことをやつて居る。それは公債と社債だ、中には勸業債券の鞘取などと云ふものをやつて居るものもあるが、これで素晴らしい財産を作つたと云ふ者はない、それは細かい金を大切に守らないで、養鶏事業のやうに大がかりにしようとするからだ、金の利廻りと云ふものは財界の大勢に査定されるものだから、時に取つては八分の事もあれば七分、六分位になることもある。今の利廻りを見るとこんなものだ。

年五分の利札附公債額面百圓のものは九十一圓五十錢位の相場だ、此利廻り五分四厘六毛。

年四分の利札附公債額面百圓のものは七十八圓四十五錢位の相場だ、此利廻り五分強。

年六分の利札附滿鐵社債百圓のものは百圓位だから、此利廻りは元通り六分。

年七分の利札附東拓社債百圓のものは百圓五十錢位で買へるから、利廻り七分弱だ。

かうやつて見ると凡そ手堅い利廻りと云ふものは判るだらう、五分四厘六毛、五分、六分、七分と云ふのだから、平均して見ると五分八厘六毛と云ふ数字が出る。だから何をやつても五分八厘六毛と云ふ利廻りでやれば堅實だと云ひ得る。しかし、それは只其儘にして置いての収入だから、自分の智慧や働きを加へるならこれ以上にならなければならぬ。この利子の倍だけ収入が欲しいとなれば倍だけの努力が冒險かゝ加はつて来る。

例へば五分利附十圓の勸業債券を抽籤直後九圓で買つて、抽籤前に九圓三十錢で賣るとすれば年四回と見て一圓二十錢の利益が生まれるから年分にするると一割三分三厘になる。

こんな問題は債券愛好者に取つて常に研究されてることだが、利用者が多くなればなるほど、債券の價値に開きが少くなるので、理窟に合つて實行は困難となる。しかし注意深く見つめて居たら、一寸樂みなものだ。

こんな話をするに田舎の親爺は頻りに感心して居たが、この頃は米が安くて、地所持は引合はない、何とかうまい工夫はないものかつて眞剣な顔をした。それは全く眞剣だらう、今の所百姓

をする人ほど可哀さうなものはない。だから俺は云つてやつた。高價な地面を雨晒しにして置くのは勿體ない。それを銀行へ擔保に入れて金を借りる、借りた金で今話した公債なり社債なりを買ふ。七分弱に廻る社債にして置いたところで、銀行へは五分七八厘の利息を拂へば宜いのだから一分二厘位の金が生れる。

例へば此處に一町歩の田地がある、それを銀行へ擔保にして四千圓の金を借りる、それで社債を買ふ、買った社債を又擔保に入れる、それは九掛まで貸すだらう、それで又社債を買ふ、九掛借りる、又買ふ、又借りる、又買ふ、又借りる。四千圓の一分二厘は僅か四十八圓だが、繰返して行くと幾らになる、興味のある数字が出て来るだらう、算盤を置いて勘定して見るがよい、と云つてやつたら、東京の人は抜目がないと云つて今更のやうに驚いて居た。

家作と地所

○月○日 晴。

今日は田舎の親爺を東京見物に連れて歩くことになつて居る。朝早く起きて仕度をして居ると